

平成30年度 西濃学園教育報告書

生徒に育てたい スキルとは ～社会参加を助けるために～



目次

はじめに	2
実践報告会記録	
前半：西濃学園卒業生の社会参加の現状と卒業時の生徒の分析	3
後半：社会参加に必要なスキルを育む西濃学園の教育環境	24
シンポジウム記録	54
社会参加に影響があると思われる10の要因とスケール（詳細）	73
実践報告会アンケート集計結果	76
10年を振り返って	90

はじめに

学園長 北浦 茂

本年度は学校法人として認可して頂いて 10 周年を迎えることができました。学校に行こうとしても足が前に進まないという悩みを持った子ども達に何かできることはないかとの思いで平成 15 年 4 月揖斐高原のゴルフ場跡のクラブハウスで宿泊型フリースクール「坂内新生塾」を創設しました。塾は翌年 NPO 法人に認可されて「坂内新生学園」と改称し、さらに平成 20 年廃校となった旧藤橋小中学校の校舎に移転し学校法人西濃学園を設立することができました。そして平成 29 年全国で 11 番目として文部科学省より「不登校特例校」に指定して頂きました。

学園は地域とのつながりを重視した教育実践を試みております。地域の人達に支持されることが学園の存続に最も大切なことと考えています。私は生徒にも職員にも地域の人達にはしっかり挨拶をすることと、催しには積極的に参加することを心掛けてきました。特にお祭りではお神輿を担がせてもらい地域の中に溶け込むいい機会を頂きました。また学園生は近くの藤橋温泉に入らせて頂いております。銭湯の経験のない生徒達はマナーを学ぶと共に地域の方々と裸の付き合いをさせて頂き、「この子達は藤橋の子だ」と言ってもらえ、地域ではなくてはならない学園になっていると言われたことには大変感激いたしました。また地域の区長さんや住民の方に学園の理事会の役員に加わって頂き運営を進めております。

さらに学園は臨床心理学の力を取り入れ「子どもの行為」の意味を理解することに力を注いでおります。臨床心理士を中心に定期的に職員と情報交換を行い、また各月に外部の専門家を招き事例研究会を実施し職員間の共有を図ると共にスキルの向上に努めております。

今回の報告会は、学園の門を叩いてくれた生徒が社会人となっていけること、つまり納税者となり、社会に役立つことができる大人へと育っていくことを学園は願っており、学園の教育の中でどのようなスキルを身につけることが重要なのか、またスキルの形成に役立ったと思われる教育環境について検討し、不登校特例校としてより効果的な教育課程、教育活動を考察してみました。皆様のご指導が賜ればこの上もない喜びです。

<実践報告会>

報告者 太田宜子（西濃学園スクールカウンセラー）

岩佐和輝（西濃学園中学校教諭）

北浦理（西濃学園長瀬校教頭）

<開会の言葉>

報告者 太田

お忙しい中、西濃学園教育実践報告会にご参加くださって、ありがとうございます。

今年度は、「生徒に育てたいスキルとは～社会参加を助けるために～」というテーマで報告会を行います。この調査研究にたずさわりました一人として、開会のご挨拶をさせていただきます。今年度は、卒業生を分析し、生徒たちが社会で働くことのできる大人へと育ていくために必要な力とは何か、を明らかにしようと思いました。「スキル」とは、技術や技能という意味があります。つまり、生まれ持ったものではなく、教育を通して身につけることができる、という意味伝えるために、「スキル」という表現をしています。小さな学校のひとつの調査研究ですが、教育や子どもの支援に携わっている方々や親御さんの子育てに少しでも役立つことにつながればうれしいと思っています。

<前半：西濃学園卒業生の社会参加の現状と卒業時の生徒の分析>

報告者 太田

それでは、今年度の西濃学園の教育実践について報告をします。

西濃学園は不登校生徒の自立を支援する教育を行っている、とうたっております。

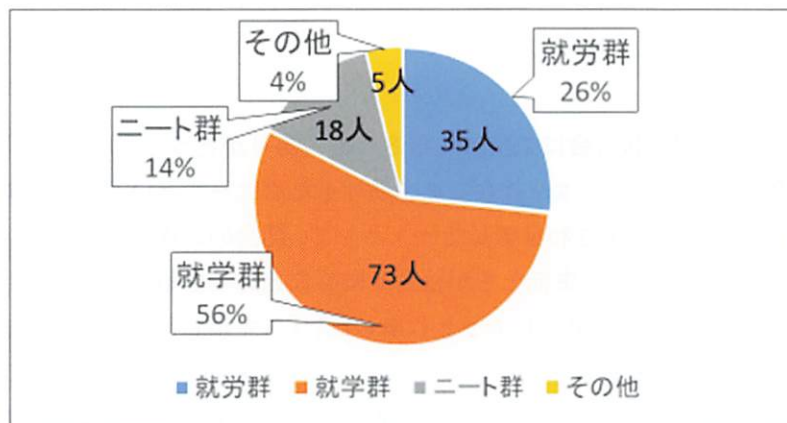
今日、ここに参加をしてくださっている保護者の方や教育関係の方々も、そのような私たちの教育活動に関心を持っていただいているのだ、とは思います。

しかし、本当に気になっていて知りたいと思っているのは、西濃学園だったら不登校生徒が本当に登校ができるかどうかと同じくらいに、時にはそれ以上に、卒業後、社会に出て行くことができるのかどうか、つまり社会で働くことができるようになっていけるのだろうか、ということだと思うんですね。どうでしょうか。

私たち、西濃学園の教育にたずさわる者も、今、私たちがやっている教育活動が、生徒が将来、社会で働くことができるようになっていくことに役立っているのかどうかということをしきんと知り、現在の教育活動に反映させていかなければならないと思っています。

そのため、今年度は、卒業生の現状を把握し、その分析をし、生徒たちをどう育てることを目指していくべきか、について報告をします。

中学・高校卒業生(131人)の社会参加の今



それでは、まず、西濃学園の卒業生の社会参加の現状について、ご覧ください。

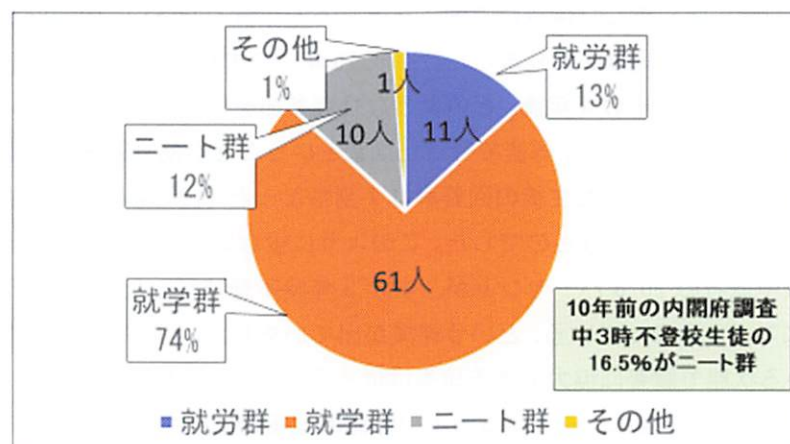
「就労群」というのは、何らかの形で働いている卒業生たちです。正規の労働者に限っておらず、パートや派遣など非正規で働いていたり、家の農業を継いでいたり、結婚して家庭を営んでいる卒業生も含まれています。

「就学群」は、高校、大学、専門学校、職業訓練校へ通っている卒業生たちです。

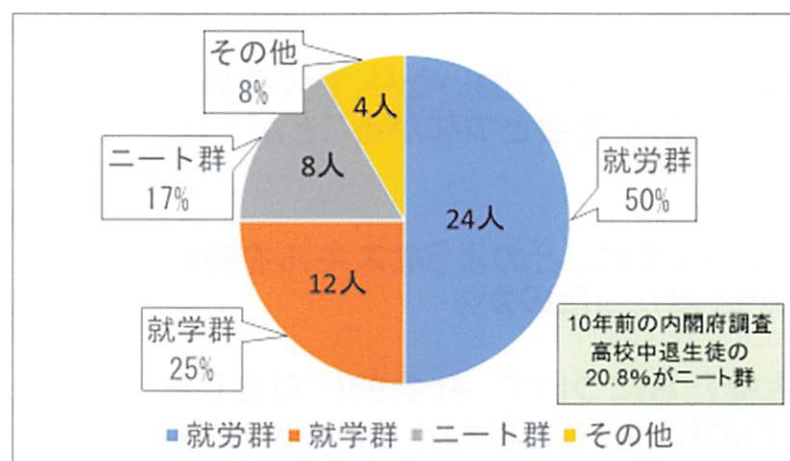
「ニート群」は、働いたり、働くために学校へ行くことができないでいる状態の卒業生たちです。

「その他」には、現在連絡が取れず、現状が分からない卒業生たち、また、とても悲しいことですが自殺というかたちで命を絶ってしまった卒業生が2名おり、彼ら彼女らが含まれています。皆様が知りたかったと思います「ニート群」ですが、卒業生131名のうち18名おり、全体の14パーセントを占めていたという現状がありました。

中学卒業生(83人)の社会参加の今



高校卒業生(48人)の社会参加の今



また、西濃学園は、設立 10 年ほどと、まだ歴史が浅いということもあり、中学の卒業生と高校の卒業生ではその動向にも差がありますので、中学卒業生と高校卒業生と分けたもの

についても記しました。「ニート」となっていたのは、中学では12パーセント、高校では17パーセントという結果でした。

では、全国的に見て、不登校だった生徒は、どれくらいの割合でニートになってしまうのでしょうか。上の表の右端に示しました薄緑色で囲ったところをご覧ください。内閣府が平成21年、今から10年前に行った調査がありました。平成16年、つまり、今から15年前に中退したり、不登校だった生徒がその4年後、どのような社会参加を行っていたか、ということ調べた調査がありました。これは、郵送で行った調査ということもあり回答率は低いものでした。中学3年時に不登校だった生徒の回答率は2割ちょっと(109/480)、高校中退者の回答率は約1割(168/1595)というものでした。このように少ない回答率における結果ではありますが、高校中退者の20.8パーセントが、中学3年時不登校だった生徒の16.5パーセントが4年後にニートとなっている、という結果が出ていました。回答率の低さに加えて、引きこもっている状態で調査に協力できる確率は低そうなので、高校を中退したり中3時に不登校だった生徒が4年後にニートになっている確率は実際にはもう少し高いのではないだろうか、と思います。また、学校教育の効果というのはいったいどれくらいの期間持続するのかということもわからないところですが、それでも、西濃学園の卒業生の社会参加の現状については、もう少しニート率を減少させていかなければならないと、切実に思うところです。

卒業生の14パーセントが、働いたり、働く準備をする、というかたちで社会とつながることができていない。

では、卒業するまでに、どのようなスキルを身に付けることが必要だったのか。

卒業時の生徒たちについて、社会的に自立した大人となるために、必要と思われるスキルや条件として設けた10要因について振り返る。

このように、卒業生の14パーセントが、働いたり、働く準備をする、というかたちで社会に参加することができていない、という現状がありましたが、では、卒業するまでに、どのようなスキルを身に付けることが必要だったのでしょうか。

卒業時の生徒たちの姿を改めて振り返りました。振り返る際には、社会的に自立した大人となるために、必要と思われるスキルや条件として設けた10個の要因について、振り返りました。以下に示します。

社会参加に影響があると思われる要因

- ①生活管理スキル...健康管理、生活リズム管理、金銭・貴重品管理・衛生管理など
- ②基礎学力のスキル...5教科の成績としてあらわれる学力
- ③問題解決のスキル...状況や優先順位を検討し計画を立て柔軟に目標を達成
- ④協働のスキル...親和、共感、協調、社交、コミュニケーション力、リーダーシップ
- ⑤責任のスキル...忍耐、誠実、勤勉、役割遂行
- ⑥能動のスキル...意欲、積極性、自主性、モチベーション、好奇心、向上心
- ⑦規律のスキル...道徳性、公共性、規範意識、マナー
- ⑧精神安定のスキル...自尊心、自己コントロール、ストレスへの対処、レジリエンス
- ⑨現実検討のスキル...現実を他者と共有し、現実と願望を調整し、現実を引き受ける
- ⑩環境調整...教師の生徒に対する適性理解と進路先とのマッチング

この10要因は、学園の教員や職員が、子どもたちの社会的自立に必要ではないかと考えているスキルや条件、あるいは、過去の就労に関する研究や調査で取り上げられたスキルを参考に設定しました。

10要因においてレベル1～ レベル5の5段階でスケール(目盛り)を作り、教師が 卒業時の生徒の姿を評定し、「就労群」「就学群」 「ニート群」の3群で分散分析を実施

そして、それぞれの要因について、5段階で評定できるようにスケール(目盛り)を作成し、卒業生たちが、卒業時にはどうだったのかを評定しました。評定は、生徒の在学時の担任を中心に複数の教師が協議をして決定しました。最も昔の卒業生については、その生徒を知っている先生が少なく2名で評定を行ったものもありますが、大方は3名で行いました。しかし、どうしても、教師の主観が入ってしまっていることはご容赦ください。

次に、「就労群」「就学群」「ニート群」において、10の要因において、どのような表れ方をしたのか、分散分析の結果を報告します。分散分析とは、3つの群の平均値の差が、意味を持っているのか、どうかを見るための分析方法です。

<結果1>

②基礎学力のスキル以外のすべての要因において

「就労群」>「ニート群」、「就学群」>「ニート群」
「就労群」と「就学群」の差はなし

基礎学力のスキル以外の要因＝社会情動的スキル
(⑩環境調整も除く)

基礎学力のスキル以上に、社会情動的スキルを身に付けることが、ニートにならないためには意味を持つのではないか

分散分析からは、10の要因の中の②基礎学力のスキル以外のすべての要因において、「就労群」>「ニート群」、「就学群」>「ニート群」という結果が出ました。

「就労群」と「就学群」における差は見られませんでした。

基礎学力のスキル以外の要因（⑩の環境調整ものぞきます）は、いわゆる「社会情動的スキル」といわれるものです。

西濃学園の調査の結果からは、基礎学力のスキルではなく、社会情動的スキルを身に付けることが、ニートにならないために意味を持つのではないか、ということが見えてきました。

そして、それぞれの要因において、どのレベルまで達成されることで、ニートとなる可能性が少なくなるのか、ということも、この分散分析の結果から大まかではありますが、見えてきたので報告をします。

分散分析の結果から 各スケールについて

	ニートの可能性が大きいレベル
	ニートの可能性が残るレベル
	ニートの可能性が少ないレベル

上記のように、各要因のレベルを色分けしました。

赤色で表したレベルは、ニート群にのみ現れた段階なので、ニートとなる可能性が大きいレベルとしました。

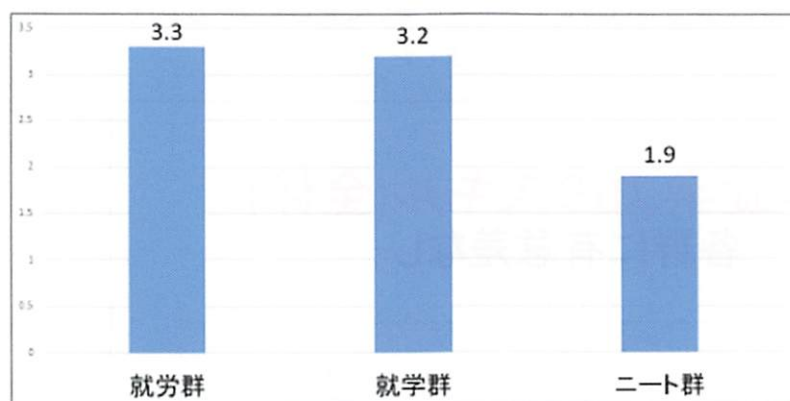
黄色は、ニート群にもニートではない群にもまたがるレベルなので、ニートの可能性が残るレベルとしました。

緑色は、このレベルに達していれば西濃学園ではニートになっていない、というレベルなので、ニートになる可能性が少ないレベルとしました。

会場のみなさまも、気になっている生徒やお子様が、どのレベルにいるのだろうか、と考えながら聞いていただくのもこの機会の活用のひとつかと思います。

①生活管理のスキル(全体)

就労群>ニート群、就学群>ニート群 $p<0.01$



①生活管理スキル...健康(通院や投薬を含む)、生活リズム、金銭・貴重品・衛生など身辺・日常生活の3領域における管理のスキル

レベル1 手助けがあっても3つの領域で自立できない

レベル2 手助けがあっても2つの領域で自立できない

レベル3 手助けがあっても1つの領域で自立できない

レベル4 手助けがあれば3つの領域で自立できる

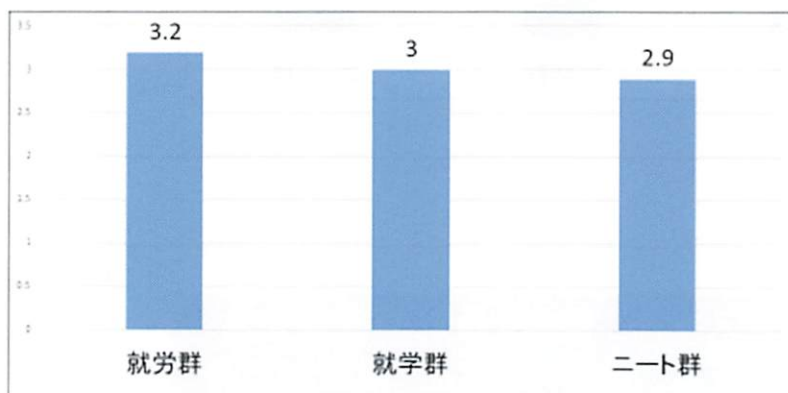
レベル5 手助けがなくても3つの領域で自立できる

では、①生活管理のスキルから見ていきましょう。棒グラフの資料は分散分析の結果です。棒グラフの上に書いてある数字は、その群の平均値を示しています。それをもとに、スケー

ルを色分けしました。

生活管理のスキルとは、投薬や通院を含めた健康管理の領域、生活リズムの領域、金銭や貴重品や衛生といった身辺や日常生活の領域という3つの領域を定め、それについて自立できているかどうかを見ています。「この3つのすべての領域で手助けがあっても自立できない」レベル1だとニートになる可能性が大きいわけです。そして、「手助けがあれば3つの領域全てで自立できる」というレベル4まで生活管理ができるようになれば、ニートになる可能性が少なくなるんだ、ということがわかりました。

②基礎学力のスキル(全体) 各群に有意差なし



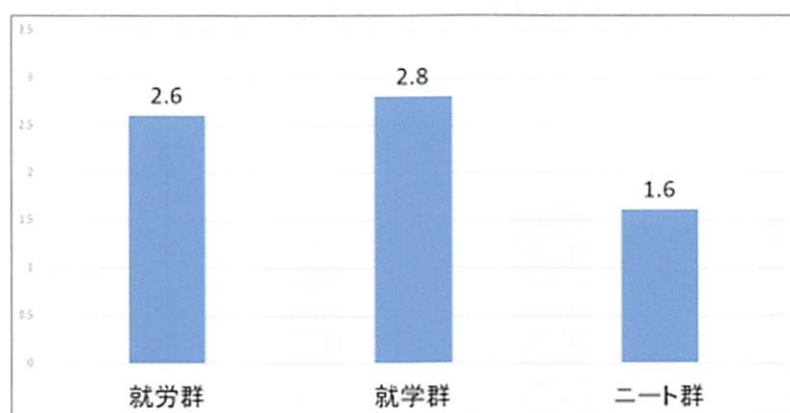
②基礎学力のスキル...

卒業時の5教科の成績
の平均値

②の基礎学力のスキルですが、先ほどの結果のところでも報告しましたように、この要因に関しては「就労群」「就学群」「ニート群」の差に意味はありませんでした。この評価に関しては、5教科の成績の平均値をとったものですので、評価にあたって、教師の主観が入るものではありません。でも、普段の成績につけ方にも教師の主観が入っているはずだ！と思われる方がきつといらっしゃることも、承知はしています。

③問題解決のスキル(全体)

就労群>ニート群、就学群>ニート群 $p<0.01$



③問題解決のスキル...目標を設定し、計画を立て、それに向かって、注意・集中・欲求をコントロールして計画を実行し問題を解決するスキル

レベル1 目標の設定ができない

レベル2 目標は設定するが、その目標や計画が不適切

レベル3 目標・計画は妥当だが、注意・集中・欲求のコントロールで失敗

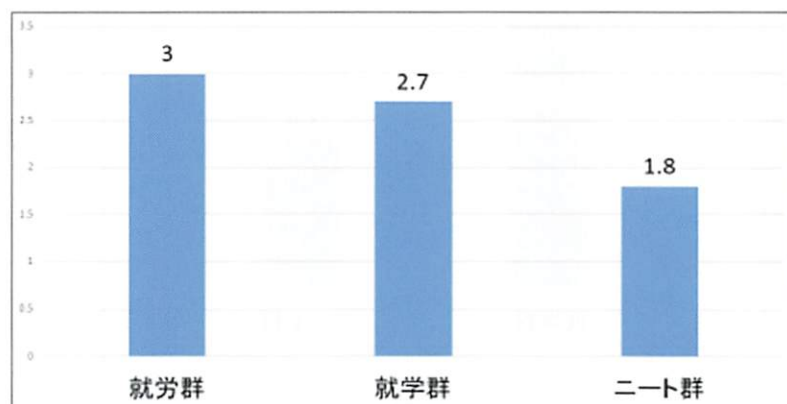
レベル4 効果的な実行はできず、解決まであと一歩

レベル5 効果的な解決ができる

③の問題解決のスキルについてです。問題解決のスキルとは、目標を設定し、計画を立て、それに向かって、注意・集中・欲求をコントロールして計画を実行し問題を解決するスキルです。「目標が設定できない」というレベルだとニートとなる可能性が高く、「注意・集中・欲求のコントロールで失敗してしまったとしても、目標・計画は妥当なものを設定できる」というレベルまで達成されているとニートの可能性は少なくなることがわかりました。このスケールに関してですが、見やすさを優先して表を作ったため、細かい基準は省かれています。スケールの詳細は巻末に示しました。

④協働のスキル(全体)

就労群>ニート群、就学群>ニート群 $P<0.01$



④協働のスキル...他者や集団と関係を作り、維持し、協力ができ、リーダーシップへつながるスキル

レベル1 他者に関心はあるが関係を作れない

レベル2 他者と関係は作れるが、トラブルが多く、関係を維持できない

レベル3 他者と関係を作り維持できるが、苦手な人と協力はできない

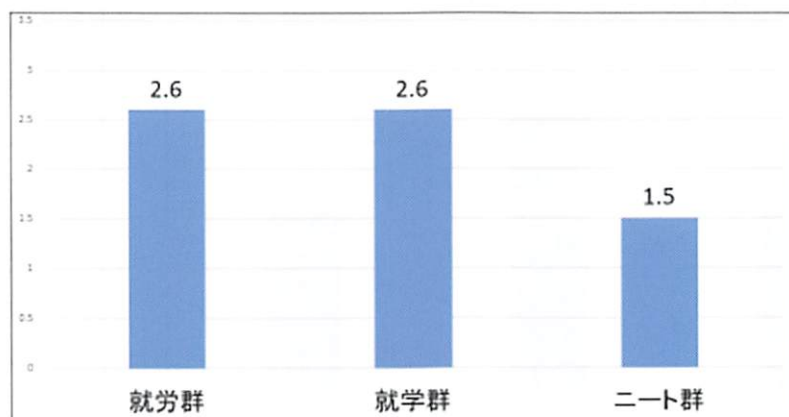
レベル4 苦手な人とも協力関係ができるがリーダーシップは取れない

レベル5 リーダーシップも取れる

④の協働のスキルです。他者や集団と関係を作り維持し、協力し、リーダーシップへつなげるスキルです。「他者に関心はあるが関係を作ることができない」レベルではニートとなる可能性が高く、「苦手な人とは協力ができなかったとしても、他者と関係を作り維持できる」というレベルまで達成されているとニートの可能性は少なくなることがわかりました。

⑤責任のスキル(全体)

就労群>ニート群、就学群>ニート群 $P<0.01$



⑤責任のスキル...忍耐力や勤勉性や誠実性を発揮し、役割を担い、頼まれたことをやり遂げるスキル

レベル1 責任を取らない生き方を望ましいとする

レベル2 なるべく責任を取らないようにする

レベル3 責任を引き受けようとするが、忍耐はできない、また、果たせなかったとき自己を正当化する

レベル4 責任を引き受け、果たせなくても自分で引き受けようとするが、やり遂げるまではいかない

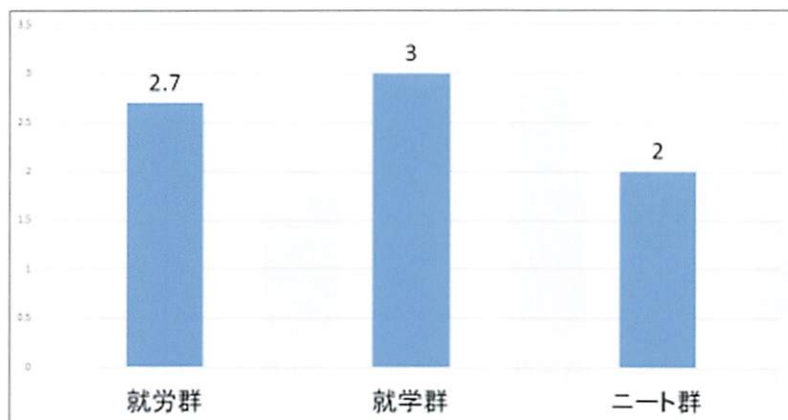
レベル5 責任を果たすことができる

⑤の責任のスキルです。忍耐力や勤勉性や誠実性を発揮し、役割を担い、頼まれたことをやり遂げ遂げるスキルです。「責任を取らない生き方を望ましいとする」レベルではニートとなる可能性が高く、「我慢することはできず、また、役割を果たせなかったとき、つまり失敗したときは相手のせいにしたりと、自己を正当化したとしても、責任を引き受けようとする」というレベル3まで達成されるとニートの可能性は少なくなることがわかりました。

⑥能動のスキル(全体)

就労群 > ニート群 $P < 0.05$

就学群 > ニート群 $P < 0.01$



⑥能動のスキル...意欲や好奇心や向上心を持ち、自分から働きかけたり動いたり、自主性や積極性を適切に発揮できるスキル

レベル1 無気力などで、指示があっても動けない

レベル2 指示があれば、その範囲で動くことができる

レベル3 意欲や好奇心は限定され、その範囲で能動的なので、自主性が適切に発揮されず、迷惑になることがある

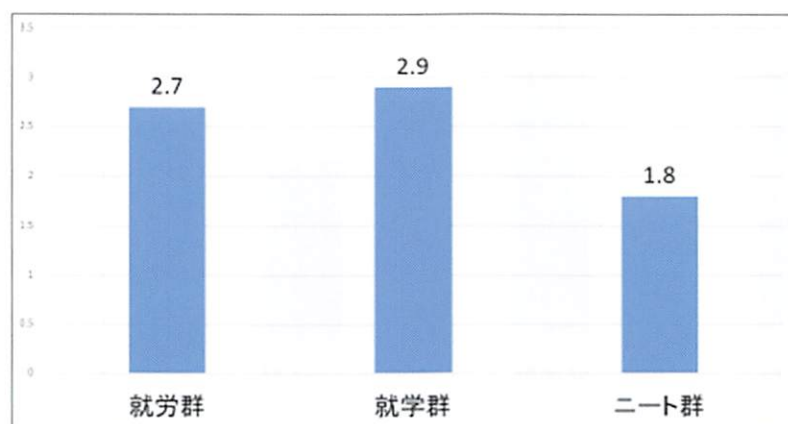
レベル4 意欲や積極性はあるが、困難があると止める。自主性が迷惑につながることはない

レベル5 困難があっても、挑戦して自分の可能性を切り開いていく

⑥の能動のスキルについてです。意欲や好奇心や向上心を持ち、自分から働きかけたり動いたり、自主性や積極性を適切に発揮できるスキルです。「指示があれば、その範囲で動くことができる」というレベル 2 だとニートとなる可能性が高く、「意欲や好奇心は限定され、その範囲で能動的なので、自主性が適切に発揮されず、迷惑になることがある」というレベルでも、ここまで達成していると、ニートの可能性は少なくなることがわかりました。

⑦規律のスキル(全体)

就労群>ニート群、就学群>ニート群 $P<0.01$



⑦規律のスキル...ルールの大切さを理解し、ルールを守ることができ、公平さや道徳性・公共性につながるスキル

レベル1 反秩序的な生き方が望ましい

レベル2 規律は守った方がいいが、自己中心的な見方しかできないのでルールがわからない。自分の思い通りになることが正しい

レベル3 ルールを守ることができるが、他律的な理由から

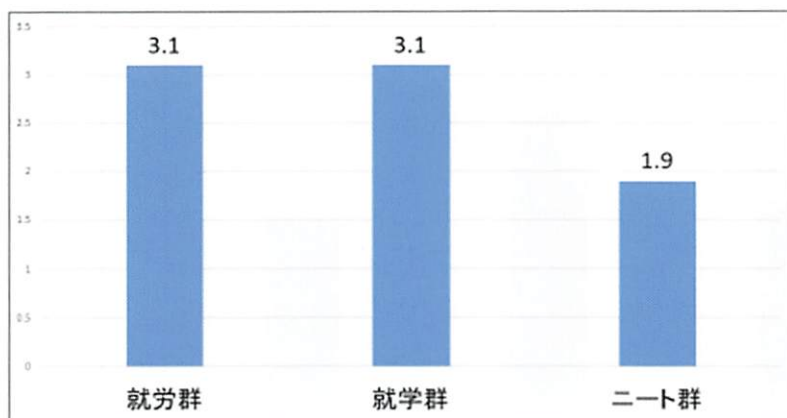
レベル4 罪悪感や自らの理想からルールを守るが形式的な運用

レベル5 ルールの柔軟な適用

⑦の規律のスキルについて、です。規律のスキルとは、ルールの大切さを理解し、ルールを守ることができ、公平さや道徳性・公共性につながるスキルです。ですが、「反秩序的な生き方が望ましい」というレベルでは危険で、「他律的な理由、つまり怒られるのが怖いから、といった理由でもルールを守ることができる」というレベルになっていれば、ニートになる可能性は低くなるということがわかりました。

⑧精神安定のスキル(全体)

就労群>ニート群、就学群>ニート群 $P<0.01$



⑧精神安定のスキル...他者も自分も尊重できる自尊心をもとに、ストレスや衝動や感情をコントロールし、精神的な安定を保つスキル

レベル1 精神状態をコントロールできず、他者や自己に向かい自殺未遂など大きなトラブルにつながる

レベル2 レベル1ほどではないが、情緒不安定で、周囲を巻き込む。リストカットや過呼吸など

レベル3 受診が必要なほどではないが、情緒不安定で穏やかではない

レベル4 基本安定して過ごせるが、ストレス下では不安定

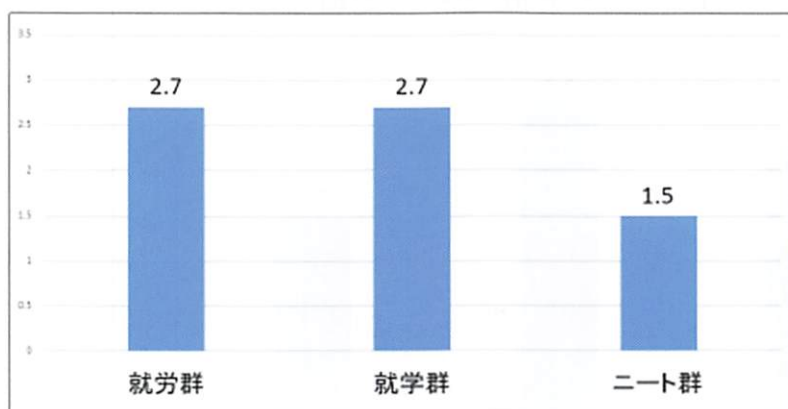
レベル5 タフネスとレジリエンスを備え、ストレスを活かす

⑧の精神安定のスキルについてです。精神安定のスキル、とは、他者も自分も尊重できる自尊心をもとに、ストレスや衝動や感情をコントロールし、精神的な安定を保つスキルです。

「精神状態をコントロールできず、衝動が他者や自己に向かってしまい、自殺未遂など大きなトラブルや迷惑につながる」レベル1では危険で、「基本安定して過ごせるが、ストレス下では不安定」というレベルまでは達成しておくことが望ましいことがわかりました。

⑨現実検討のスキル(全体)

就労群>ニート群、就学群>ニート群 $P<0.01$



⑨現実検討のスキル...願望や理想と現実の自分のバランスを取り、現実を受け入れるスキル

レベル1 自己愛的な願望や理想の世界から出ることができず、悩めない

レベル2 願望と現実の違いに悩むが、現実を拒否

レベル3 常に悩みながら現実と向き合おうとしている

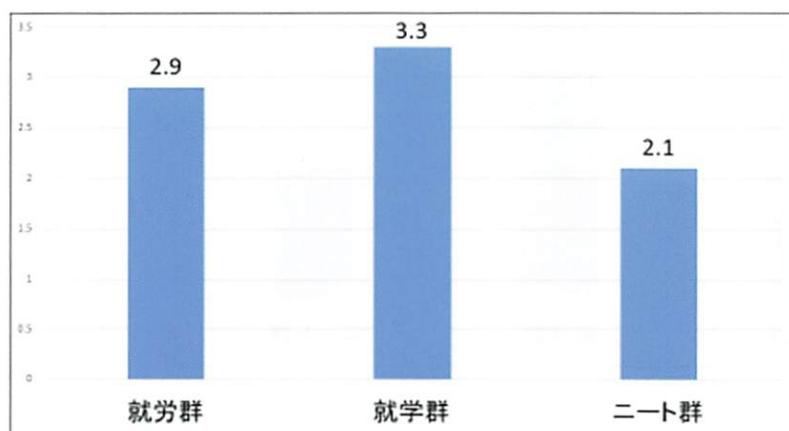
レベル4 悩みは低減するが、ネガティブに現実を引き受けている

レベル5 ポジティブに現実を受け止める

⑨の現実検討のスキルについてです。現実検討のスキル、とは、願望や理想と現実の自分のバランスを取り、現実を受け入れるスキルです。「自己愛的な願望や理想の世界から出ることができず、悩めない」レベルでは危険で、「悩みながらも、現実と向き合おうとしている」レベルまで達成しておくことが望ましいことがわかりました。教育や支援に携わっている方は、支援する相手が「困ることができるかどうか」というのはとても大きな指標だとわかっていただけるのではないかと思います。

⑩環境調整(全体)

就労群>ニート群、就学群>ニート群 $P<0.01$



⑩環境調整...本人の特性や能力を適切に理解し安心できる進路決定ができたかどうか

レベル1 進路を見つけることができなかった

レベル2 本人の適性よりも期待や理想が大きいなど不安の大きい進路

レベル3 不安と安心が五分五分で、手厚いフォローが求められる進路

レベル4 安心の方が大きい、フォローがあった方がいい進路

レベル5 フォローの必要なく安心できる進路

⑩の環境調整の要因についてです。他の9つの要因と性格が異なり、この要因は、教師側・学校側の判断や決定が問われてくる要因となっています。本人の特性や能力を適切に理解し、安心できる進路決定ができたかどうか、を見ています。「本人の適性よりも期待や理想が大きいなど不安の大きい進路」と不安が大きいレベルでは危険で、「不安と安心が半々で、手厚いフォローが求められる進路」と感じられるレベルの進路決定ができていると、ニートの可能性が少なくなることがわかりました。

以上、10個の要因について見てきましたが、このレベルでも大丈夫なんだ、本当に大丈夫なのか？と感じたものもあったかもしれませんが、西濃学園の生徒の分析では、このような結果となりました。私たちは、まず、ニートの可能性が低くなるレベルまで、全ての生徒の成長を図らねば、と考える次第です。

社会情動的スキルでは、どの要因が影響力を持つのか、ロジスティック回帰分析を行い、「就労・就学群(非ニート群)」と「ニート群」の違いを分析(卒業生全体)

影響を持っている順に

- ⑨現実検討($p < 0.05$) > ②生活管理 >
- ⑩環境調整 > ④協働 > ⑤責任 >
- ⑦規律 > ⑧精神安定 > ⑥能動 >
- ③問題解決 > ②基礎学力($p < 0.01$)

9ページの結果1に示したように、分散分析からは、10個の要因のなかでは、②の基礎学力のスキルを除いた9つの要因が重要だ、意味を持つんだ、ということがわかったわけですが、では、これらの要因の中では、どの要因が、より重要な影響力を持つのか、ロジスティック回帰分析を行い、「就労群と就学群というニートではない群(非ニート群)」と「ニート群」の違いを見ていきました。ロジスティック回帰分析というのは、あまり聞きなれない分析方法かもしれませんが、例えば、「がんになる人」「がんにならない人」では、喫煙や年齢やコレステロールや血圧といった複数の要因と照らし合わせて、どのような要因がどれく

らの影響力を持っているのか、といったことを調べる時に使われています。ここでは、「ニートにならない生徒」と「ニートになってしまう生徒」において、どの要因の影響力が大きいのか、ということを見るために使用しました。

その結果、卒業生全体では、⑨現実検討>②生活管理>⑩環境調整>④協働>⑤責任>⑦規律>⑧精神安定>⑥能動>③問題解決>②基礎学力という順番で要因の影響力が大きいことがわかりました。ただ、この結果は、現実検討のスキルが最も重要であることと基礎学力のスキルが最も重要でないこと以外は、信頼性が足りなかったので、あくまでもこのような傾向があるようだ、という理解でよろしく願います。

発達段階によって、重要なスキルが異なる可能性もあるため「中学卒業生の結果」「高校卒業生の結果」についても分析

中学卒業生の結果

⑩環境調整>⑨現実検討>①生活管理>
⑦規律>④協働>⑤責任>③問題解決>
⑥能動>⑧精神安定>②基礎学力

高校卒業生の結果

⑨現実検討>⑧精神安定>①生活管理>
④協働>⑤責任>③問題解決>⑦規律>
⑥能動>⑩環境調整>②基礎学力

また、発達段階によって、重要なスキルが異なる可能性もあるため、中学卒業生の結果、高校卒業生の結果についても見ていきました。

<結果2>

全体に共通して重要な要因は、重要な順に

⑨現実検討のスキル

①生活管理のスキル

④協働のスキル

⑤責任のスキル

中学卒業生においてのみ重要だった要因は

⑩環境調整

高校卒業生においてのみ重要だった要因は

⑧精神安定のスキル

これらの結果から、中学卒業生、高校卒業生と共通して重要な要因は、重要な順に

⑨現実検討のスキル

①生活管理のスキル

④協働のスキル

⑤責任のスキル

と言えるのではないかと、思います。

そして、中学卒業生においては

⑩環境調整

が重要で、高校卒業生においては

⑧精神安定のスキル

が重要である、という、発達段階における違いもありました。

では、西濃学園のどのような教育活動や教師のかかわり方によって、これらのスキルは育まれているのでしょうか。西濃学園の具体的な教育活動と、うまく育ってくれた事例と、良かれと思ってやっていたけど社会に出てうまくいかなかったため私たちがかわりを見直すきっかけとなった事例について報告します。

<後半：社会参加に必要なスキルを育む西濃学園の教育環境>

報告者 岩佐

それでは、重要であると分かったスキルを育んでいる西濃学園の教育環境についてご紹介をします。まず、最も重要であった⑨現実県東のスキルについてです。

⑨現実検討のスキル

- ・簡単にいうと理想の自分と現実の実力に差がある。
- ・その差に対して悩めない、また向き合えない生徒。

- ・簡単にいうと理想の自分と自分の実力に差があるか？
- ・その差に対して悩めない。向き合えない。生徒がレベル1。

事例

野球の**実力**がないK君

- ・今まで野球部に所属したことがないのにできと思っている状態。

・野球の実力がないK君 高校1年生4月に西濃学園に入学しました。

今まで野球部に所属したことはなく遊びでキャッチボールやバッティングセンターへ行っていたくらい。だが自分は野球ができると思って入学してきました。エピソードとしてはプロ野球選手のバッティングを見て「なかなか良いな」と発言をしました。ものすごく上から評価していました。その後、練習試合を行いました。彼は打てず、守れずで、全然できませんでした。それは当然の結果でそこから練習をしていけば良いと私は考えていたのですが、本人から試合後に「野球部をやめたい」と言ってきました。まさに現実に向き合えない状態です。しかしその時、自分の実力が分かったか？そんなすぐやめるのか？と、さらにこちらから現実を突きつけると学園生活が嫌になっていたかもしれません。そんな中、まあまあとありあえずやっていこうといいながら練習を行いほめることのできる場面でほめて何とかやっていき学園を元気に卒業していききました。

初めての練習試合後に現実を突きつけても意味がないのです。

現実検討をつけさせるためには

信頼関係・その子の器づくりが大切。

そして、踏み込む！

信頼関係が必要だと考えました。信頼関係がないと話を聞いてくれません。また信頼関係を築くにも時間が必要です。1年くらいは優にかかります。

またその子の器づくりが大切になります。それらができて初めて否定的な現実を突きつけることができる。

ようは踏み込むということです。

私が考える器のイメージ

- ・こちらの気持ちや意見を受けとれる心の余裕。
- ・心の中の受け皿（指導やこちらの気持ちを受け取れる状態。）

私が考える「器」ができたときのイメージは

- ・こちらの気持ちとか意見とかを受けとれる心の余裕が器であると思っていますし
- ・心の中の受け皿（指導やこちらの気持ちを受け取ってくれる）注げる状態なので注げるというものです。

次に、ではなぜ現実検討ができない状態になってしまうのでしょうか。

現実検討できない原因

- ①状況（家庭環境や学校生活）
 - ②性格・特性（素直さがなく、こだわりが強いなど）
- ①・②に問題があり、現実検討できない。
- ③精神状態（話が聞けない）←器がない

現実検討できない原因。

①状況（家庭環境や学校生活）に問題があったりうまくいかなかった経験をした。

②性格・特性（素直さがなく、こだわりが強いなど）

この①・②に問題があるので現実検討できなくなっていると考えました。そして①、②がうまくいっていないので

② 精神状態が悪い＝器がない状態 話が聴けない

よって

・信頼関係の築き方・器の作り方1

- ・①の状況→家庭や学校で経験できなかった事を学園で経験する。
- ・②の性格・特性→その子を理解するためにカウンセラーがいてその問題を全職員が認識しておく。
- ・学園生活の中で生徒には**感謝**を常に伝える。
子どもたちに受け取らせる！！

ありがとう

信頼関係の築き方・器の作り方1

①の状況の改善として、家庭や学校で経験できなかった事を西濃学園で行う。自分の事を知らない生徒の中で学校生活をスタートさせる。もう一度学校生活ができる環境。生活も寮へはいれば新しく始めることができる。

②ではその子の性格と特性を理解するためにカウンセラーがいて生徒の事を全職員が認識しておく。そうすると理解された空間になる。それは居心地がよくなる。

と考えられます。

さらに学園生活の中で生徒には感謝を常に伝えるようにしている。承認には「ありがとう」と「すごいね」といった2種類があると思います。すごいねでは、すごくないし、すごいが時にはプレッシャーに感じてしまうことがあります。そこで全職員が感謝を生徒に言う事によってやった事に対しての感謝という事で受け取らざるをえない状況を意識的に作るという事をしています。

・信頼関係の築き方・器の作り方2

- ・「ありがとう」を何度も言う。意図的に作る。探す。
- ・「ありがとう」のパターンを少し変える。
- ・最初はありがとうと言われても何も思わない。何度も言われることによって感情が動くようになる(嬉しい、もっと言ってほしい等)。



器が出来始めている！

- ・次のステップでは、「当たり前だけどね。」と少し現実を伝える。

信頼関係の築き方・器の作り方2

・何度もありがとうといえる状況を意図的に作ります。トイレ掃除をしてくれてありがとう。日直当番であっても黒板を消してくれてありがとうなど。また ありがとうを言えることを探します。

・ありがとうを言うにもパターンを少し変える。

・言っていく中で最初はありがとうと言われても何も思わない。それは人への関心が乏しいと「何それ」や「なんとも思わない」のです。何度もありがとうをいわれる場面が訪れると感情が動くようになる。嬉しいとか、もっと言ってほしいとか。

そのような経験が積み重なってくると気持ちが受け取れる状態。器ができているといった事になる。

・次のステップでは“ありがとう”の後に当たり前だけどねと少し現実を伝える。

西濃学園での 生活から社会へ

- ・器ができれば自分で現実に気づくことができる。
- ・こちらの気持ちを受け取ることができる。
- ・失敗事例と成功事例。

器ができれば自分で現実に気づくことができる。こちらの気持ちを受け取ることができる。気持ちを注げる状態。

失敗事例…失敗事例（割り算やひっ算ができないのに弁護士になりたいといった生徒がいました。西濃学園では①学園生活②性格の理解が整っていて③の精神状態もよくなっていた。学園生活の中で上げ底された自己イメージ、どこか特別扱いをされていないとやれないまま現実をそこまで突きつけることなく、卒業していき、崩れた生徒がいた。西濃学園ではよかったけど、社会では通用できなかった。本人が現実を理解して現実検討できていないままだったから、とこの経験から反省しました。だからこそ、この現実検討を育む教育に取り組んできました。

・成功事例…数学の問題で途中式を書かないことが、「かっこいい」とこだわっていた生徒がいました。それでは間違えることを繰り返していたし時間もかかっていました。本来なら否定的な言葉を使ってはいけないと思っているのですが、十分な信頼関係ができていると確信していたので、直接的に表現したほうが良いと思って「あなたは頭がにぶいのだから途中式は必要なんだ」と伝えました。その後、自分の現状を理解し、自分に必要なことをするようになった生徒がいました。全員に言っているわけではないし、この生徒にだけ言った言葉です。ものすごく極端に踏み込んだ事例です。

※踏み込むことにより現実を伝え、現実検討できるようになるのです。今後、社会で生きていく上で必要な「人の気持ちを受けとれる器」もできた状態だと思っています。

次に、重要であった①生活管理のスキルについてご報告をします。

①生活管理スキル

健康管理、生活リズムの管理、
金銭管理、衛生管理など

**※寮生活という教育環境が、
社会的自立に大きな役割がある。**

このスキルを育てているのは、寮生活だと、自信をもって言えるところです。そこで、寮生と通学生の卒業時の状態を比較しました（対応のないも検定を実施）。すると、全ての要因において、寮生の得点が優位に高いという結果が出ました。西濃学園は、寮生活のできる唯一の特例校ですが、寮生活という教育環境が「生徒の社会的自立に、異議の大きいこと」を知っていただきたいと思います。

それでは西濃学園の寮生活を紹介します。起床から就寝までの大まかな流れです。

寮生活の流れ

起床 午前7:00

朝食 午前7:30

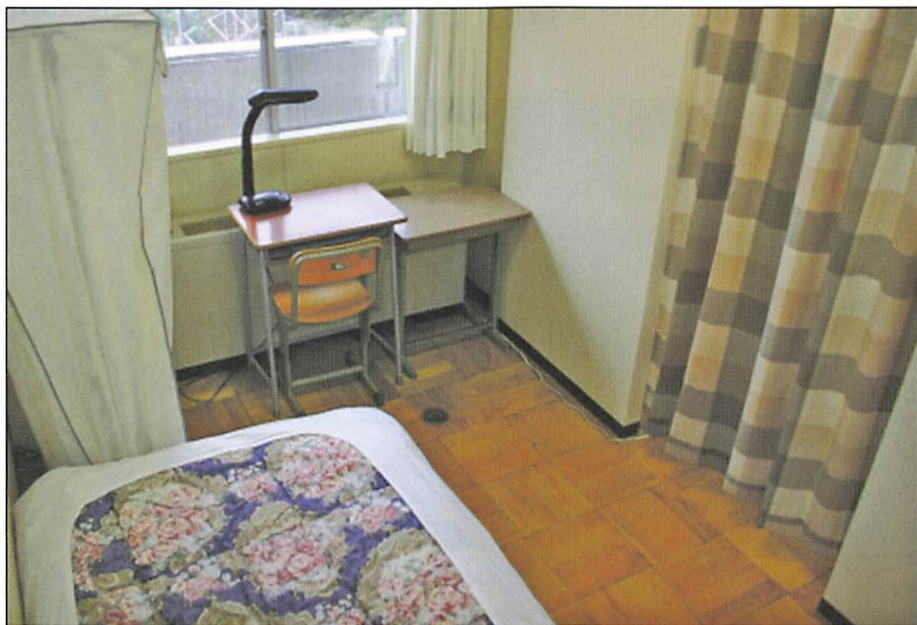
授業 午前8:40～午後3:00(中学、高校でやや異なります)
※携帯電話やゲームの開放

夕食 午後6:30(冬季は6:00)

入浴 近くの温泉に行きます。(地域の方との交流の場)
※携帯電話やゲームの回収 午後10:50
(係が行います)

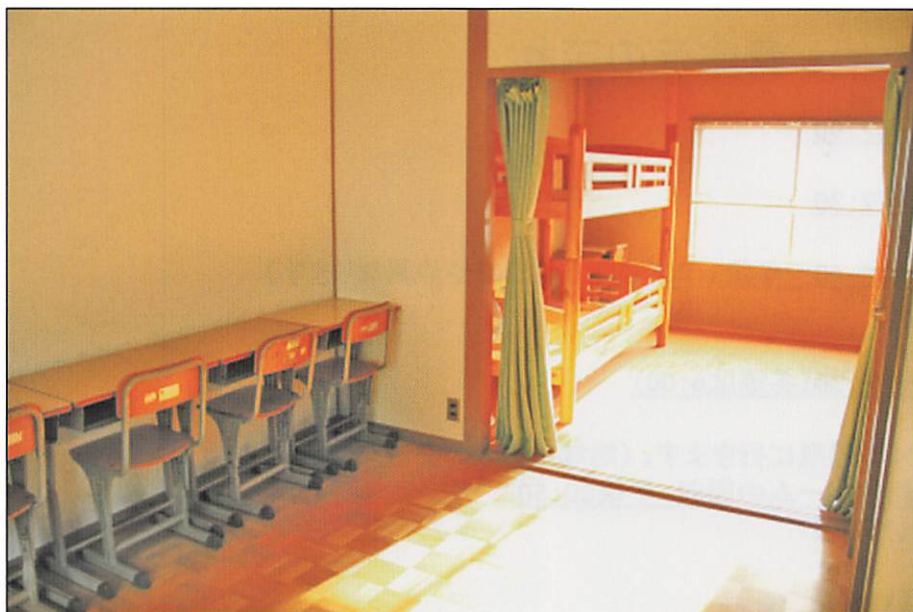
消灯 午後11:00

就寝



起床後、自主的に校舎の清掃をしてくれる生徒もいます。

起床は、午前7時です。起床して自主清掃をする生徒もいます。また、生徒同士で起床を促し合う光景も見ることができます。



寮には個室と相部屋があり個々に応じて変更します。

朝が起きられるということはその時の状態を図るバロメーターとも考えられ、起床は大切なポイントであると言えます。



朝食を食べずとも、起きて食堂に来ることを推奨しています。

朝食は、午前7時半です。中には「食欲がない」と訴える生徒もありますが、朝食を食べずとも、食堂に降りてくることを奨励しています。



毎日の授業に出席する大切さを考えています。(授業風景)

授業は、午前 8 時 40 分～午後 3 時。ただし中学校と高校ではやや異なっております。規則正しい生活習慣と毎日の授業に出席する大切さを日々生徒と相談しながら考えています。



毎日の授業に出席する大切さを考えています。(授業風景)

授業後は部活動や自由時間として過ごしています。また、授業後から携帯やゲームも自由としています。



毎日行く温泉は地域の方々とのコミュニケーションの場にも。

午後6時より夕食を取り、その後、近くの温泉へ入浴に行きます。温泉では公共の場のマナーについて考える場、また、地域の方々との交流の場にもなっており、ただ入浴をすることだけではなく、子ども達にとって大切な役割を果たしてくれています。



携帯・スマホ等は、年上の仕事として回収を促しています。

午後10時50分には全生徒の携帯電話、スマホ、ゲーム機の回収を行います。年長者が呼び

かけて行うことで、その役割の大変さや集団生活の規則について改めて感じてくれるものとなっています。



消灯時間より早く寝たいと言う生徒につきましては、就寝する前に自分で提出する様になっています。



部屋の掃除や洗濯も寮生活では重要な意義があります。

また、寮生活を通して、自分の部屋の掃除や洗濯なども自分で行わなければならないと言う自覚と経験を積む場となっています。



同じ寮生と共に生活をして、毎日のリズムを作ります。

寮生活では同じ寮生と共に生活することで、毎日の生活リズムを「集団」で作っていくことができます。



女子寮の様子。職員と生徒が語り合う場となっています。

寮生活は、子ども達にとって不自由な事もありますが、生徒同士が同じ楽しみを共有できる場であったりと、貴重な経験の場になっていくものと思います。



卒業生へのお別れパーティー。(女子寮)

午後 11 時には生徒は全員、自室に戻り消灯をして就寝をします。また様々な所で先輩や部屋長と位置付けている係の役割も規則正しい生活を作るのに大きな意味を果たしています。

寮生を経験することは、

集団で動くことが、ある程度できるようになる。

時間をかけて経験していくことが必要であり大切である。

※寮生を経験するということは、この流れに沿って、集団で動くことができるようになっていくと考えられます。

ここで事例を紹介したいと思います。

彼女は、現在は専門学校生ですが、中学1年生の秋に西濃学園へ転入し、5年半をこの学園で過ごし、高校を卒業しました。入学時は、衛生の概念に乏しく、夜はゲームがしたいのでお風呂に入らず、また、言われて入ったとしても雑な入り方のためよく悪臭がしていました。歯磨きをはじめ、身体を清潔に保つことから指導をしなければなりませんでした。部屋の片付けも全くできず、彼女とは相部屋になりたくない、という声もよく聞きました。彼女には、女子職員が中心となり、総出で、彼女の生活管理の指導を行いました。その結果、卒業の頃には、髪が見苦しくないかを気にするようになり、またダイエットに取り組むこともできるようになりました。「以前はどこへ行くのにも誰かと一緒にいないと不安だったけど、寮生活をしたことで自分でやらなければいけないと言う気持ちになった」との感想もありました。

現在は一人暮らしをして一年がたとうとしていますが、一人暮らしができていること自体が成長の証ではないかと思っています。

続いて、④協働のスキルと⑤責任のスキルについて説明させていただきます。

④協働のスキル

親和、共感、協調、社交、コミュニケーション力、
リーダーシップ

⑤責任のスキル

忍耐、実行、誠実、勤勉

西濃学園では

・コラボレイト(特例校カリキュラム)

地域の方々との交流で、社会に対する見方や考え方を学びます

・ライフ・プランニング(特例校カリキュラム)

コミュニケーションについて、アンガーマネジメント、未来への展望について考える等々

・夏山登山

北アルプスへ3泊4日での登山体験

・自主清掃

清掃場所が重ならないように相談して自ら決めて掃除をしています。

西濃学園ではコラボレイト、ライフ・プランニング、夏山登山、自主清掃がこれらのスキルを身に付ける教育環境だと考えます。



コラボレイト: 地域の方々と共に行動する協働と責任体験。



写真:横山神社



写真:横山ダム

コラボレイト:地域のことを観て、聴いて、調べ、考えます。

まず、コラボレイトとは地域の方々と共に行う活動と、縦割りの小集団活動における協働と責任の体験を行っています。具体的には、地域の方々を招き、当時のことなどのお話を聞かせて頂いたり、地域について調べに行ったり、また地域の行事に参加をさせて頂いています。



地域の祭礼ではお神輿担ぎもさせて頂いています。



地域の祭礼ではお神輿担ぎもさせて頂いています。

これは地域の祭礼に参加させて頂き、お神輿をかつがせて頂いた時の様子です。



文化祭で学んだことを発表するため取り組んでいます。

今では、地域と西濃学園が合同で文化祭を行い、生徒たちは「地域学習」の発表の場として参加し地域の方々からも喜びの声を頂くことができるようになりました。



次にライフ・プランニングとは、「協働のスキル」や「責任のスキル」について体験的に学ぶことを考えた授業です。たとえば、苦手な人とのつきあい方や自己制御（欲求満足を遅延するなど）のスキルについて学んでいます。

この写真は、上手な自己主張の仕方について学んだあとに実践している様子です。



そしてこちらは、相手の話を上手に聴く姿勢について取り組んでいる様子です。この様に実際に人前で話をしてみるなど体験的な授業を行っています。



夏山登山 毎年、北アルプスへ3泊4日で実施しています。

そして、先ほど説明いたしました、「生活管理のスキル」と同様「寮生活」も、この協働と責任のスキルを育てていると思われますが、「夏山登山」が、このスキルを育む教育活動として大きく役立っているものと考えます。



↑登頂に喜ぶ生徒。

槍ヶ岳山頂を目指す
生徒たち。→

西濃学園では、毎年、全職員と全生徒で3泊4日の北アルプスへの登山に挑戦をしています。私たち職員が1年間の中で最も緊張感を持ち、万全の体制の下で臨んでいる行事でもあります。



非日常の集団行動から協力体験や達成感を体験します。

夏山登山は、日常的な環境と大きく異なり、命の危険につながることも十分に起こり得ます。こうした緊張感の中で、生徒は集団行動をします。いつも以上に、互いに傷つけ合わないこと、思いやりを示し合うことを意識し、協力し合う体験をします。



西濃学園の夏山登山は今年で10回目となります。

そして協力し合う喜びや、感謝をしたりされたりする心地よさや大切さを実感します。そして、協力し合いながらも、自分の道のりは自分でまっとうしなければならない、という厳しさも実感します。しかし、まっとうしたときの達成感や自信はかけがえがなく、やり遂げた時の喜びや充実感は他では味わえないものだと思います。西濃学園の夏山登山は今年で 10 年目となります。

そして、もう一つの教育環境は、「自主清掃」です。



自主清掃: 就寝前に清掃場所を自ら決めます。

現在は、高校生を中心に行われています。掃除場所の枠組みの印されたホワイトボードを利用して、就寝前にそれぞれが重ならないように清掃場所を自ら決め、起床後、掃除をします。

いつもありがとう！ エシ感謝。 ウェルカムグー (人) 日置ボード

	消毒液	ペーパータオル トイレトイレットペーパー	ゴミ回収	3階トイレ	2階トイレ	1階トイレ
予約	さや	さとう	なかみ	小林	いりや	谷島
済						
	階段(西・東)	廊下2階	廊下1・3階	ペットボトル回収	灯油	女子
予約	西東	いりや	山本		田村	
済			1F 3F			

ありがとう！ ほんとにありがとう！ おっちゃん様です。

生徒の考えた自主清掃用ホワイトボード。

このボードも生徒が考えて作りました。当初は学園長や他の職員の手伝いをしたい、しかし邪魔はしたくないと言う善意の気持ちから作られたものです。



現在は灯油の補充など、様々なことを行ってくれます。

現在では、掃除以外にもストーブの灯油の補充や、空き缶やペットボトル等のごみ回収や、ハンドソープやハンドペーパーの補充なども生徒自らの意志で行ってくれています。

途中で辞め、また、再開する生徒がいましたが、「一人でゆっくり寝ているより、みんなと掃除をやった方が気持ちいいし、自分もすっきりするから」、と言いました。協働と責任の本質に触れた言葉だと思います。



ハンドソープやハンドペーパーの補充。



生徒の自主的な清掃活動が「教育環境」になると考えます。

事例を紹介いたします。

彼は高校から入学をし、三年間を寮生として過ごし、卒業しました。現在は、観光会社で働いています。入学当時の彼は、自信が全くありませんでした。対人不安も大きく自分を守るためにナイフを持つこともありました。しかし、寮生活をはじめ、夏山登山や、部活動の練習といった教育活動を通して、自信とともに、他者との信頼関係を育んでいきました。そんな彼は、自主的に掃除を始めました。すると、彼の背中を見ていた生徒に、自主清掃の輪が広がり、その流れは彼が卒業した現在も受け継がれています。

協働を行うことと責任を果たすことが、両輪として、互いを助け合っている活動がこの自主清掃です。

協働を行うことと、
責任を果たすことが、

両輪として、互いを助け合っ
ている活動が**自主清掃**です。

報告者 岩佐

続いて、中学生にのみ重要な事でしたが、⑩環境調整について、西濃学園の教育環境をご紹介します。

⑩環境調整

中学生から高校生へ

中学卒業後のその先の進路指導。

環境調整 中学学生から高校生へ
中学卒業後のその先の進路指導。

1 番の目標は

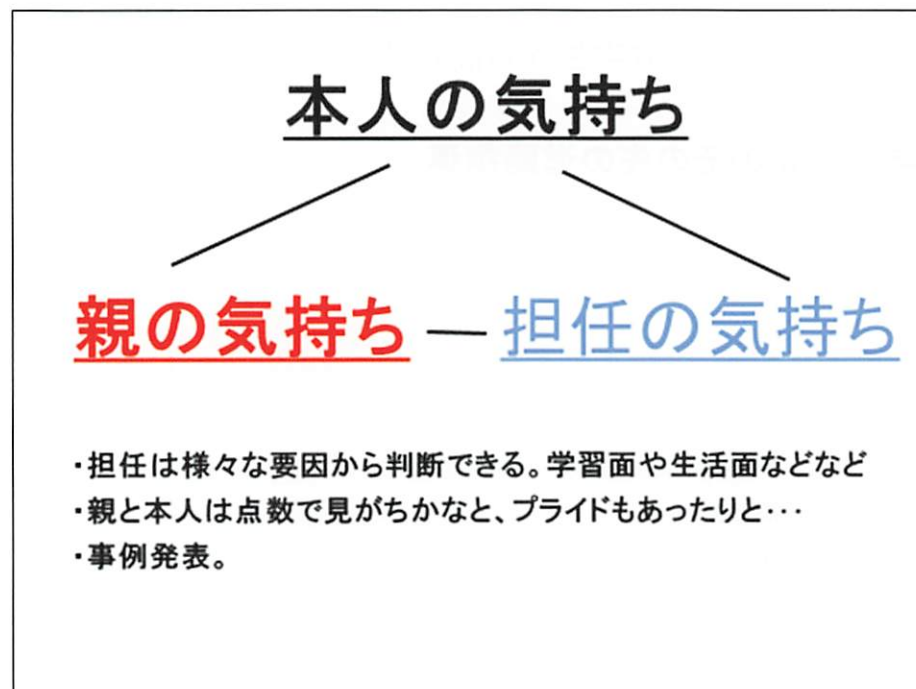
高校を卒業できるように！！
途中でやめないようにを目標に掲げる。

1 番の目標

高校を卒業できるように！！

「途中でやめないように」を目標に掲げる。

学力面的にギリギリで高校進学させるか、余裕をもって進学させるか、また学校の雰囲気はどうかの判断。



本人の気持ち 親の気持ち 担任の気持ち

・親と本人の進学への考えは、プライドもあつたり、点数を見て行けるところへ行かせる。頑張て行けるよう努力させる。もちろんやります。頑張らせることは必要なことだと考えているが担任は様々な要因から判断できる。学習面や人間関係、生活面などを考え客観的に見ながら判断する。いわば案内人のように調整する。そこにはしっかりとコミュニケーションをとり努力しなければならないところである。

・失敗した事例・・・私が担任として経験した事例ですが。女子生徒がいました。両親が医者。姉が進学校へいっている状況。西濃学園へは中3の4月に転学してきました。過ごしていく中で元気を取り戻しつつありました。そんな中、進路指導の時に本人は親からのプレッシャーはなかったのだがプライドがありレベルを落とした高校へは進学できないといった気持ちから、進学校へ行きたいと直前で変更し受験しました。しかし僕の気持ちではまだ進学校でやっていけるかが不安でした。僕が考えていた学校はもう少し学力の低いところで余力を残していけるところを進めていたからです。その予感が的中してしまい高校を退学

してしまいました。その後は完全に方針を変えてニュージーランドに留学して今は順調に過ごしています。環境調整としては失敗した例だと思っています。

・良かった事例…自分は大学へ進学したいと考えているがまだまだ学力面的に不安がある。普通の学校へ行行ってやっていける自信がなかったです。自分のペースでやっていきたいといった本人の気持ちから通信制へいって余裕をもって高校生活を過ごしました。現在高校3年生で大学進学を決めこの4月から大学生です。今からが楽しみです。
※案内人がその子にあった進路先、その子の気持ちに寄り添い一緒に悩み納得できるよう努力していく必要があると思っています。

報告者 北浦（理）

最後に⑧精神安定のスキルについて説明させていただきます。

⑧精神安定のスキル

高校卒業生においてのみ重要だった要因

自尊心、自己コントロール、ストレスへの対処、
レジリエンス

西濃学園では

・抱える環境

子どもを取り巻く様々な環境の調整と、子ども自身が自ら作り上げる環境をより適切に支援すること。

・ケースカンファレンスの意義

全職員が生徒の特性の適切な理解に努める。

・カウンセリング

精神安定のスキルを身に付けることができる様に支援。

この要因は、高校卒業生においてのみ重要度が高かった要因でした。これは、発達段階の違いで、中学校卒業時においては、まだまだ精神的に不安定でも、ニートになるかどうかは見えないが、高校卒業時にはある程度の精神安定のスキルを身につけていないとニートになる可能性が高くなるということだと考えます。

高校に限ったことではありませんが、生徒の精神安定のためには、まず、西濃学園が地域に認められているという学校としての安定感、2つ目に「スタッフみなが互いに信頼し合えているというチームの安定感」という抱える環境がしっかりとしていることが役立っているのではないか、と思います。

また、ケースカンファレンスは、全職員が参加をして、生徒の特性の適切な理解に努めます。ここで、生徒への対応が検討・共有されることで、教員は先走って自分の思いや願いを生徒にぶつけ過ぎてしまうことを防ぐことができます。すると、生徒に不必要なストレスを与えることがなくなり、精神安定につながりやすくなると考えられます。

さらに、与えられる環境の要素だけではなく、全生徒へのカウンセリングやストレス・マネジメントの授業を通して、精神安定のスキルを身につけることができるように支援をしています。

子ども達が大人になったとき、
ニートにならないために身に付けて欲しいと
願う**スキル**です。

西濃学園はその**スキル**を育てていると考え
ています。

ご意見、ご指導よろしくお願い致します。

子どもたちが大人になったとき、ニートとならないために身につけてほしいと願うスキルと、それを育てているのではないかと考える西濃学園の教育活動について報告をしました。これらについて、文部科学省の方々から、また、教育活動に携わってこられた先生方にご意見やご指導を賜りたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

<シンポジウム>

司会 嶋野道弘氏（元文教大学教育学部教授）

コメンテーター

松木秀彰氏（文部科学省初等中等教育局児童生徒課生徒指導室長）

木村正男氏（可茂教育事務所課長補佐）

北浦茂（西濃学園学園長）

報告者 太田宣子（西濃学園スクールカウンセラー）

岩佐和輝（西濃学園中学校教諭）

北浦理（西濃学園長瀬校教頭）

司会 嶋野 ではみなさん、こんにちは。今日シンポジウムの司会を仰せつかりました嶋野と申します。私は今退職をしておりますが、文教大学で教員を目指す学生たちを指導してまいりました。どうぞひとつよろしく願います。それでは今日のゲスト、シンポジストの方、自己紹介をお願いしたいと思います。では松木さんから。

コメンテーター 松木（文科省） はい。みなさんこんにちは。文部科学省生徒児童課生徒指導室長をしております松木と申します。今日はこういった機会にお招きいただきましてどうもありがとうございます。私から自己紹介を兼ねてと申しますか、そもそも不登校の実態がどうなっているとか、不登校特例校という言葉自体をあまり聞き慣れないかもしれませんので、そのあたりをちょっと説明させてもらうことで自己紹介に代えさせていただきますと思います。不登校はですね、実は過去、近年、5年連続で実は増加しております、平成29年度の問題行動等調査というのがあるんですけれども、小中の子ども14万4千人が実は不登校になっている。この統計調査では年間30日以上学校に通えなくなった子どもという風に定義しているんですけれども、その数が14万4千人ということでございます。しかも、その中で中学生が一番多くて、10万9千人くらい、10万8999人ということでございます。だいたい300万くらい中学生がいっぱいいますので、実は31人に1人が不登校になっている。これが今の実態であります。どのクラスにも1人は不登校の子がいる、くらいの数が実はいるということで、日本全国でどこでも共通して大きな課題となっているということでございます。そういった現状を踏まえてですね、いろいろな対策がとられていますが、その中の一つが、不登校特例校ということになります。特例とは何が特例かと申しますと、不登校のその児童生徒のために、特別な教育課程の編成、カリキュラムを認められています。その他は、一般の中学校とそこは変わらないんですけれども、中身が徹底的に不登校児童向けに、いわばカスタマイズされた学校というものと、考えていただければと思います。例えば、一般の中学校では、例えば中学1年生で国語の授業日数が何時間とか、いっぱい決まっているんですけれども、それを少し総合的な学習の時間の方に移すとか、そこを柔軟化したものを認めて、不登校児童生徒のために、そこが居場所となれるように、カスタマイズした学校ということでございます。当然、その教育の質が確保されているかどうかを

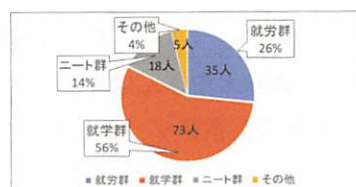
文部科学省の方で見させていただいているんですけれども、そのため、まだですね、平成 16 年くらいから始まっている制度ですが、未だに全国で 12 校しかない。その中の 11 番目に指定された学校がこの西濃学園さんということであります。私も実際こうやって特例校に足を運ばせてもらっていただくのはこれが初めてですので、私自身も今日いろいろ話を聞いていろいろなことを勉強させていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いします。

司会 嶋野 松木さんありがとうございました。木村さん、自己紹介をお願いします。

コメンテーター 木村（教育事務所） では、失礼いたします。こんにちは。木村正男と言います。可茂教育事務所に所属しております。担当は生徒指導の担当をしていますので、各学校でもし事案などがあったときには市町村さんの教育委員会に情報が入りますけど、そこから事務所に上がってきて、県の安全課、学校安全課に情報を流すといった担当をしています。その一方でですね、自分自身は一般社団法人の日本学校教育相談学会に所属しております。長い間、学校生活に不適應になりがちな生徒の指導に携わっています。その意味で可茂地区内の、こちらは西濃地区内ですが、可茂地区内にも学校になかなか馴染めない子どもたちが多くいます。その数名はこの西濃学園さんでお世話になっていまして、特にその中の数名は私が直接関わった子であるので、時々西濃学園さんにはお邪魔させていただいたりとか、いろんな子どもたちの情報をいただいたりしているということがあって、今日ここに立たせていただいているのかなと思っております。よろしくお願いします。

司会 嶋野 ありがとうございます。他に北浦学園長と報告会を推進してくれた太田さんがここにいらっしゃいます。それでは早速ここからシンポジウムに入りたいと思いますが、まずスライドをもう一度見せてください。このスライドをもう一度見直してみたいと思いますけど、西濃学園に来て、そして西濃学園に来てもおかつ西濃学園の駐車場まで来

中学・高校卒業生(131人)の社会参加の今



ても校舎の中に入れない、あるいは校舎に入ってもなおかつ教室の中に入れない子どもたちもいると聞いております。この子どもたちが、これを見ると、56 パーセント（就学群）と 26 パーセント（就労群）ですから 82 パーセントの子どもたちが西濃学園を卒業して、社会的自立をして学校に行ったり職に就いたりしている。この数字ってこれだけでも僕はとてもすごいことだと思うんですね。ところが西濃学園はそのすごいことは、残りの 14 パーセントとその他の 4 パーセント、この中には本当に悲しいことだけれども自殺をされちゃった方もいらっしゃる、いるという話もありましたけれども、この 18 パーセントに目を向けて、この今回の報告調査、研究報告に手をつけた、これが動機なんですね。ということは、西濃学園というのは、この学園を卒業したら限りなく就学するか就労するかっていう、もうどこ

までも 100 パーセントを目指していきたいと、ニート群とかその他をどこまでも 0 パーセントにしたいという気持ちで、この研究は着手されていると思うのですね。僕はこういう風に思ったときに、この学園は何て責任感とか使命感とか、そういう気持ち強い学園なんだと、この報告会はそういうことを意味しているように感じたんですね。他にコメンテーターの方も全体的な感想はあると思うんですけど、まず私はそんなことを感じまして、とても素敵な、責任感のある学校なんだなという風に思ったのですが、木村さん、松木さんは全体的にどんなことをお感じになったのでしょうか。

コメンテーター 松木（文科省） ああ、今のご指摘の通りですね、このニート群、その他の部分に着目して分析をしてみようと、まさに学校全体で取り組み始めたというところが、大変称賛に値すると思います。こういった不登校になるお子さんというのは実は、勉強はできるんだけど、ちょっと対人的なコミュニケーションができないとか、情動的スキルっていいですか、そういった部分が得意ではない、ということ言われているんですけども、実はそこから先に分析に進もうっていう動きってこれまで見られなかったところなんですね。今日のご発表お聞きしまして、10 項の要因に分けて、それぞれレベルを 1 から 5 まで分けてですね、そういった分析のツールを開発して、そこを徹底的に分析してみようっていう風に始められた姿勢は非常に重要です、こういった分析を進めていくことで、この学校だけでなく他の学校に応用できるのではないかな、などですね、いろいろ期待できるところが非常に大きいと思っています。ですのでそういった取り組みというのを非常に私も称賛したいと思っています。

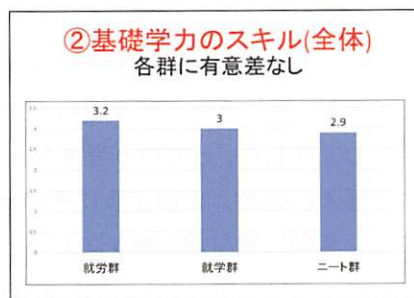
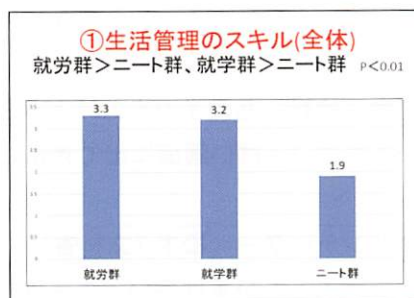
司会 嶋野 木村さんお願いします。

コメンテーター 木村（教育事務所） はい、私は二つのことを感じています。一つは、研究報告、最初太田さんは発表の中で 10 年しかという言葉を使っておられましたが、自分は逆に 10 年の蓄積をずっとしてきているすごい説得力のある報告なんじゃないかなと思いました。今も話がありましたが、10 年で 131 名の個々の子どもたちを想定してずっと振り返って要因を分析してみる。そこは本当に説得力のある内容じゃないかなと思ってますので、そしてその上で社会情動的スキルの高まりこそが大事だということを一結論出されたわけですので、これは大事な知見ではないかな、報告ではないかな、ということを考えています。二つ目です。二つ目は不登校だった子どもたちの支援を考える一つの方向性を示しているのではないかなと思っています。全国的に不登校になっている子どもたちというのは今まだ増えている状態です。現に学校の校舎の中で保健室に居るとか、相談室に居るといふ子がいるわけです。その子たちにどういった支援ができるのかと、実際学校の中に居る教員は迷っていますし、支えている親御さんも迷って見えると思うんです。その迷いの中の一つの方向性として、今回出していただいた報告は何か示していただくことがあったんじゃないかなと思います。以上です。

司会 嶋野 ありがとうございます。私は先ほど申し上げましたように、不登校だった子どもたちが社会的に自立した大人へと成長させることを約束して、子どもや親に約束して、この学校に入れて、と。それに対してまだこれだけの数が残っているから、なんとかこれを0にしたいと。責任感や使命感。それから松木さんの方からは、これは本当に画期的なことなんで、こういう具体的な調査は今までなかったことなんだ、というお話がありましたし、木村さんの方からは、説得力のある、非常に説得力のある報告であるということ、それと方向性、その不登校の改善の方向性を示している、ということと言われたわけですね。北浦学園長、僕ら褒めすぎですか。

コメンテーター 北浦（学園長） ありがとうございます。私は前、愛知県で、高校で教師をさせていただいているときに、不登校で、学校へ来たくても来れないんだ、という生徒と出会ったんですが、その時今のようにいろんな受け皿がない時代でしたので、彼らは辞めていったわけなんです。この子どもたちを何とか戻せないかというところが出発点ですので、そうおっしゃっていただいて、それに僕らが向かっているということをお認めていただきまして、大変嬉しい思いをしております。

司会 嶋野 はい、それでは少し具体的な中身に入っていきたいと思いますが、今日、今回の調査研究の結果についてですね、ここでもう一回スライドを見せてください。10項目あるんですけど、全部は見られないので、まずこれ生活管理のスキルですね。ニート群が圧倒的に、ニート群だけが低いんですね。就労と就学はほぼ、ほぼ同じ分析のようですね。では次を見てください。その次です。これ違うんですね、基礎学力のスキルっていうのは就労と就学とニートがほぼ同じなんです。10項目中、ここだけなんです。ね、同じなのは。ちなみにもう一つ見せてください。ほら、次はまたニート群だけがスキルが低いんですよ。だから、10項目のうち9項目がニート群だけがスキルが低くて、基礎学力のところのスキルだけがほぼ



同じなんです。ということを取り上げ、僕はそこに着目したときに、子どもが社会に出て、自立して社会に出ていくためには基礎学力って非常に重要だと思うんですけども、でも基礎学力だけではだめだっていうことをすごく感じたんですよ。基礎学力を身につけると社会に出ていく力にはなるんだけど、基礎学力がついていてもニートになってしまうという可能性がある。そういう意味では今回の報告は、僕は、いったい学力って何？とか、今まだどちらかというと、どここの進学校に入ったとか、どういうところに何人進学させたとか、割とそういう観点で測られていますけれども、もう一度子どもが自立して社会

に出ていくときの学力ってなんだろう、身につけさせるべき力ってなんだろうということを、すごく明確に問題提起してくれたということで、この結果報告というのはすごく意味があるんじゃないかなっていう風に思っているんですけども、このあたり、コメンテーターの木村さんや松木さんにお話をいただきたいなと思いますが、木村さんお願いします。

コメンテーター 木村（教育事務所） はい、ではお願いします。確かにご指摘があるように基礎学力をどう考えるかということなのですが、今回の西濃学園さんの目標が、働くという形で社会でつながることを目標に決める、そこから考えていけば基礎学力が中心になっていかないことは十分に分かります。基礎学力スキルというのは今後の人生において助けになることはあるかもしれませんが、それが十分ではないと社会につながれないかどうか、っていうとそうではない例は、実はいろいろ教え子というか、子どもたちの中で見てきていますので、今身につけないといけないのは学力もあるけれども、今回提案していただいたような、社会情動スキルというのは重要なファクター、要因になってくるんじゃないかな、ということは自分も感じました。ただ大事なことは、西濃学園さんは、だからといって基礎学力はいいよ、あとにおいとくよ、と言っているわけではなくて、今回の提案の10項目の中に入っています。それを入れながらも、でもまず情動スキルを大事にしていこうと言っていらっしゃる。そのスタンスが自分はすごく共感できるな、と思っています。

司会 嶋野 基礎学力を上げようとして、先生方がいろんな工夫を、指導方の工夫をされているのがいっぱい画面に出てきましたよね。じゃあ松木さんお願いします。

コメンテーター 松木（文科省） いろいろな事情、要因によってですね、不登校になってしまう子どもが実は多たって先ほどお話ししたんですけども、文部科学省としてはですね、実はそういったお子さん、まずはお子さんのことを中心に考えて、無理に学校に行かせるといった考えは持っていないんですね。そういった子どもにはしっかり教育の場を与えるべきだ、という考えが今の考え方になっています。ただやはり、ゆくゆくは社会的自立を果たしてほしい、っていう考えがあります。ですから社会的自立に向かってどのようにしていけばいいのか、どのようにその情動的な部分のスキルを上げていけばいいかっていうところを真剣に取り組み始めている西濃学園さんの取り組みっていうのは、非常に素晴らしいと思っています。また、割と勉強はできるけれど、他のコミュニケーションが苦手という子もいるんですが、例えば小学校のところから不登校の傾向があったという子については、実はその小学校の部分の勉強がまだ追いついていない、ということもあるわけです。そういった子に対しては例えば個別にその部分を補うように個別指導というものを取り組んだり、あるいはコミュニケーション力を上げるためのグループ的な指導といった、まさに不登校特例校ならではのですね、気遣いみたいなのがやはり必要になってきて、そういった部分にも力を入れていただいて、最終的には自立を目指して取り組んでいただいているっていうところが非常に重要だと考えております。

司会 嶋野 ここに 10 項目出ているんですけども、我々は割と基礎学力スキルって誰でも認識していると思うんですね。じゃあそれ以外何があるんだって言われたときに、なかなかこういう項目を挙げられてこなかったんだと思うんですね。今回 10 項目挙げてくれただけでも、こういう観点で少し子どもを多面的に見てるとい、こういう示唆を与えてくれているっていう観点からも、すごくこの報告の中身は意味があるんじゃないかと思うんですが、木村さんいかがですか。

コメンテーター 木村（教育事務所） そうですね。確かにおっしゃる通り、基礎学力スキル以外のスキルっていうのは注目されてこなかった部分なんですけれど、生徒指導っていう側面から言っても、国内でですね、最近の動向としてはこの社会情動スキルをしっかり計画的にプログラムして、身につけてさせていこうという動きがあるのは実際事実です。で、結果そういうスキルが達成して高まってくると、学力もついてくるとい報告も挙がってきているので、そういう方面では今後ますます注目されるんじゃないかと思っています。

司会 嶋野 そうするとこの 10 項目というのは、まさに基礎学力も含めて、相互に関係し合っているということで受け止めていいわけですかね。

コメンテーター 木村（教育事務所） そうですね。その通りだと自分は思っているので、学力スキルだけを上げようと特化してやっても、なかなか上がってこないということはあると思うし、逆に言うと情動的スキルだけをやっていけば学力が上がるかという、やはりそこも補わなければいけないので、相乗的に上がっていくのではないかなと思っています。

司会 嶋野 不登校対策として考えるときに、松木さん、やっぱりこういう多面的観点って大事ですよ。

コメンテーター 松木（文科省） そうですね。こういった具体的にどういった要因があるかっていうことを分析するって、非常に、例えばこの学校さん以外のですね、これだけ不登校の子どもが増えている状況で、悩んでいます先生とか学校とか、いっぱいあるんじゃないかと思います。そういった学校さんの助けにもなるような分析ではないかと思っていますんですけど、今現状では各学校さんそれぞれ頑張っているんですが、こういった詳細な分析の元でやっているかっていうとあまり出来ていないんじゃないかっていう気がしていて、その同じ頑張るにもですね、こういった詳細な分析の裏付けとか、どういった部分に力を入れればいいのかとかですね、具体的にこの子どものどこに原因があるのかって分かった上でやるのとやらないのとでは、おそらく得られる効果に大きな違いが出てくるのではないかと思います。その意味でこういった詳細に分析するっていうのは、こういう取り組みが始まっているっていうのは非常に良いことではないかと思っています。

司会 嶋野 太田さん、この10項目が出てきたっていうことで、先生方に何か変化が出てきていますか？子どもの見方とか。

報告者 太田 はい、この教育実践報告を行うに当たって、中学の担任、高校の担任が入って、8人で実行委員会を作って、半年以上ですね、もっと長いかな。はい、かなり長い期間をかけて取り組んで作ってきた、選定した要因だったリスケールだったりするんですけども、その話し合いの過程を通してすごく学ぶことがあったなっていう実感があります。

司会 嶋野 さっき頑張りって松木さんの方からお話がありましたよね。頑張る、これ子ども、子育てでみんな頑張っているんですけども、どういう風に頑張るのか、どこを頑張るのかってのが、非常にクリアにしておく必要があるんじゃないかって思うんですね。そういう意味では少なくともこの10の視点、うちの子どもに関してはここを頑張らせよう、子どももどこを頑張ればいいのかこういう観点から自覚するってことも、ものすごく大事なんじゃないかと思うんですけども、そういう意味では子どもの見方がすごく広がって、親にとっても自分の子どものどこをどこから見ていけばいいのかということのすごい情報が入ったんじゃないかと思うんですね。木村さんいかがでしょう。

コメンテーター 木村（教育事務所） そうですね。こういうスキル観点が、学校とか学園さんだけではなくて、今こうやって公表されたっていうことで、多くの方に共有理解してみんなで育てていこうっていうところが重要と思いました。こうやって今回は西濃学園さんに提案いただいたのですが、自分は最近業務の関係で、引きこもりの、ニートと似ているんですけど、引きこもりっていう支援センターの方とお会いしてやり取りするんですけども、話を聞いていて、そうか、と思ったのは、引きこもりの相談にみえる方の多くは小中学校の時に不登校だったという子ばかりではないんですよ。小中学校の時にまず普通に生活してたんですけども、10代、20代、30代、それぞれ世代のステップアップする段階で引きこもっていくっていう方がいるんだってことを聞いたんですね。っていうことをいうと、今まさに学童期とか生徒の時期にドロップアウトしてしまうという子たちに対してだけに必要なスキルではなくて、どの子にとっても大事なスキルであって、そのスキルを育て上げなくてはならないということはすごく思っています。

司会 嶋野 そうですね。ある意味これ、人間ってこういうものを身につけた者が社会にちゃんと自立して出ていける人間ということですから、これ、人間まるごと見るということにもつながるんじゃないかなって気もするんですけど、もう一つ着目したいのは、中学校卒業時のスキルの優先と、高校卒業時の優先が違ってたじゃないですか。中学校を卒業するときに必要なスキルはなんでしたっけ。環境調整ですよ。それから高校の場合は現実検討というところが非常に重要だということですよ。僕らさっきは、これら10の要因を並べて横に見ていたんですけど、これはどっちかというと発達ということで、今度は縦軸で見て

いくんですけれど、小学校はないんですけれど、小学校で不登校になっちゃう場合の要因もおそらく出てくると思うんですけど、それはこっちに置いておいて、縦で見えていくということもまたものすごく意味があると思うんですけども、これはいかがでしょう。この分析をお願いします。

コメンテーター 松木（文科省） そうですね。10 項の要因をただ抽出するだけではなくて、順番をつけていることが非常に、今後どこに力を入れれば良いかということが分かりますので、より具体的な、適切な対処がとれるっていう意味では、非常にこれも良い分析だと思います。あと、特に、今日聞いて現実検討スキルというスキルが非常に大事だという話を聞いて、自分自身もやっぱり理想と現実のギャップを認識していて、日頃考えているんですけど、これ大人になっても必要なスキルですよ。不登校児童生徒だけではなくて、誰でも自立した社会人になる上では必要なスキルであって、それがその子どもたちに接するときに、どれが一番優先順位が高いのかとか、こういう順番も含めて分析されているというのはやはり先生方にとっても、他の学校にとっても、非常に役立つ分析ではないかと思っています。

司会 嶋野 やっぱり高校生になると社会がそれだけ中学生よりも実社会が近くなるわけですね。ですからそれと同時に、僕らはやっぱり片方ではいつも夢とか希望とか、そういうものを持ち続けて生きていかなきゃいけないんだけれども、それしか見えなくて現実が見えないという、そこにギャップが起こっちゃう。ですから高校生あたりになると現実検討スキルが非常に重要であることがよく分かるし、中学生になるとむしろ環境調整のスキルがすごく大事で、この辺りをやっぱり考えていかなきゃいけないというのは、すごく納得ができるデータ、分析結果になっているんじゃないかな、と思います。我々はそういう風に受け止めているんですけども、太田さんいかがですか。そういう受け止め方は。

報告者 太田 はい。まず、この結果が出たとき、基礎学力の結果だけ、各群で差がなかったことが見えたとき、学力が高くてもニートになる可能性はあるし、学力が低くても、つまり、5教科の成績ですね、5教科の成績が低くても社会に出て働いていくことができるわけだ、ということが結果として出てきたときは、驚きとともに納得する部分、両方の部分を感じました。ただこの結果が出たときに、学園長も言われたのですが、私たちが学力として測っているもの、つまり、成績として評定するものがこれでいいのか、という反省点というか疑問点が出てきました。もっと、社会情動的な部分を含めたものを私たちは学力として扱っていくことが今後は重要ではないのか、という疑問点です。西濃学園の学力観、あるいは学力を評価する方法についても今後は、論じていかなければならないところかなと思っています。

司会 嶋野 そういう意味では、学力観とか、教育観とか、いったい教育の最終目標は何なんだろう、という大きなところにも問題提起をしているんだろうな、と思いますね。社会

で自立した大人として成長させていくことが教育の大きな目的、と共通理解できるような気がするんですけども、今この調査結果というのは、皆さん、画期的で、いいものだとおっしゃっているんですけど、先ほど見ていただいた統計の結果ですよね。先ほど太田さんの説明の中では、どうしても主観が入ってしまう、と。一般的に、主観というのは統計結果として信頼性が欠けることにつながってしまうものですが、ちょっと主観が入るんだということを心配されていましたよね。その点は、木村さん、どうでしょう。

コメンテーター 木村（教育事務所） はい。自分が思うにはですけども、10 の要因を考えるにあたって、西濃学園さんは、スケールを作られましたね。10 の項目それぞれの達成度に対する5段階のスケールを作った。そのスケールを作ったことと、それによって子どもたち一人一人について、一人でつけるのではなく複数の人と協議をして、この子は何段階だね、と話し合っただけののだとすると、それは、主観が入ったとは言いにくく、客観に近いものがあると言えるのではないかな、と自分は思っています。

司会 嶋野 こういう調査で、非常に大事なものは、信頼性があるかどうか、って言うのは当然ですよ。それで、今、気にされているんだと思います。主観が入ってしまえば、信頼性に問題があるのではないかと。でも、今木村さんは、心配することないんだよ、というお話でした。統計の取り方や、整理の仕方や、10 の項目の観点の出し方について、そこは、そんなに心配することないんだよ、というご意見でした。松木さん、信頼性ということに関して、この報告はどうでしょうか。

コメンテーター 松木（文科省） 例えば、数学とか英語とかの評価って、割と客観的にできやすいと思うんですよ。正解か、不正解か。しかし、この情動スキルというのは、性質上、主観が入るというのはやむを得ないのではないかと思います。ただ、重要なのは、評価者によるばらつきがないことだと思っているんです。ある先生はレベル1と言っているけれど、違う先生はレベル5と言っているとしたら、それは、問題だと思うんですね。それをそろえるために、重要なのは、学校の先生全体で、そういう認識が共通化されていることだと思います。一番いいのは、基準を作ったり要因を分析したりする過程を、例えば一人の優秀な先生が考えるんじゃなくて、学校全体でこれを考えて、みんなが納得した上でスタートしていくことが重要なんですけど、まさにそのプロセスを西濃学園さん、半年かけてやっていて、みんなが納得して始めている、そうであれば、おそらく、評価のばらつきって、ほとんどないんじゃないかと思うんですね。レベル3だったら、レベル3。その情報が全ての先生に共有されている。縦割りで、この先生だけ知っている、というのではなくて、リストのレベル観が共有されていて同じような問題認識で子どもに対して、というのができているのであれば、多少主観が入っていたとしてもそれは大した問題ではないというふうに考えていいと思っています。

司会 嶋野 実は私も同感で、こういう調査というのは、言ってみれば臨床的研究ですね。お医者さんが患者さんを何人も何人も見て、いろんな傾向をつかんでいく、というのと同じように、子どもたちを時間をかけて、複数の目で論議しながら見ていく。一人の先生がやっている時点では主観なだけで、それがたくさんの先生で見て共通理解がされて、あるレベルの中で「それだよな」って共感されたものというのは、かぎりなく客観に近くなっていくということなんだろうと思いますね。そういう意味では、お二人のご意見をお聞きしたときに、主観的で独善的だよ、ということとは心配することはないよと。私もこれは、客観性が高いと言えて、つまり、信頼性があると言えるんじゃないかと、思っています。そういう意味では、自信をもって、いろんなところで広報してほしいなあと思います。で、この調査研究は、数値的な結果で、グラフで出して終わりにしていないんですね。そこが西濃学園のすごく誠実なところで、いったい、どういう自分たちの子どもたちへのかかわり方がこういう社会情動スキルを育てているんだろう、ということで、分析、考察をしているわけですよ。生徒へのかかわり方としては、どこに着目されましたか。かかわり方という点で。レベルが上がって、82 パーセントまで職に就くか、学校に行くか、ということで出しているわけですけど、スキルを上げているわけですね。何がそうさせているのか、ということについても報告があったので、皆さんがどこに着目をされたか、ということをおうかがいしたいのですが。

コメンテーター 松木（文科省） もう一度質問を聞きたいのですが、着目点というのは、スキルのところでしょうか。

司会 嶋野 いや、スキルのレベルを上げているかかわり方、というか、学校でやっている地域の祭りに参加している、とか。例えば、現実検討のスキル。現実を他者と共有し、現実と願望を調節し、現実を受け入れるということが、社会に出ていくためには、いかに重要か、これを育てるために学園ではこういうことをやっているということは報告があったと思いますが、その中で着目されたことがあれば。

コメンテーター 松木（文科省） まず、今日の報告で、1 点気になったことがあってですね、数学の因数分解ができない、でしたっけ。途中の計算式を飛ばしている子どもに対して、「あなたは頭がにぶいんだから」という発言をした。これ、よろしかったら、岩佐先生にその場面を少し詳しく聞きたいなということと、現実をしっかりと認識させるための荒療治だ、というように受けとめましたけれど。今日、学校の先生って来ていらっしやいますかね。できましたら、どうお感じになったか、会場からもお聞きしたいというのを思います。言葉だけをとらえて、これは、いい、悪いというのは私は判断したくないんですね。そのときの状況とか、子どもの受け止めがどうだったのか、その結果子どもが改善されたかどうか、とか、いろいろなことをまず、岩佐先生にお聞きして、その後、広くちょっと意見をお聞きしたいんですけど。できれば、お願いいたします。

報告者 岩佐 岩佐です。まずですね、感情的に言ったわけではないんです。僕は、3点あると思います。感情的に言ったわけではないし、2つ目には、途中式の必要性をものすごく説明しました。こうやって段階を踏むからこそ、数学の問題はできるんだ、と何度も何度も説明しました。それでもやりません。どうしたらやるだろうか。すごく言葉を考えたんですけど、どの言葉を考えても相手を若干、ディすることになる、というか。踏み込まなければならぬためには、そこが大事なところ。また、3つ目は、その子は、器ができていた。器に注ぐにはタイミングもあると思うんですけど、彼が器を出してきたような感じがあったときに、「にぶい」という言葉を使って、直線的にストレートで投げました。で、結果、彼はその後、ちょっと書くようになったんですね。ちょっと書くようになって、問題ができるようになった。そして、そのことに対して、本人や親御さんから何も言われなかったし、卒業するときには、親御さんからは、こんな楽しい学校生活はなかった、本当にありがとうございました、とすごく感謝されて、卒業していきました。なので、僕としては、踏み込んで正解だったかな、と思っています。

司会 嶋野 会場からも聞きますか。みなさん、どんなふうに、この「踏み込む」というかわかり、「器作りが大切、そして踏み込む」という生徒へのかかわりが大事なんだ、ということを受けとめましたか。これ、非常に具体的な手立てとして、重要なことで、現実的なことなんですけれども、これについては、何か、ご感想、ご意見ありますか。

フロアーから 垂井町の北中学校に勤めております、林田と申します。2年前まで、揖斐川町に勤務させていただいておりました。西濃学園さんには、お試しで数名、でも行きません、という子もいました。この秋から、実は、うちの生徒もお世話になっておりますので、そのお礼の意味で、今、手を挙げさせていただいたのですが、一言でいうと、あー、一緒だな、そんなに西濃学園も変わらない、やっぱり見習わなきゃと思いました。日頃自分たちでは使っているキーワードにない、新しい、現実検討。やっぱり、これが一つの大きなキーワードだな、と学ばせていただきました。それから、自分の学校に持ち帰ろうと思って、チェックをつけたのは、今映っている、信頼関係。器。それから、ありがとう、ですね。すごいね、と私メモして、△、とメモしました。ありがとうの言葉を多用して、そこで信頼関係を作っていくって、お前ダメだ、と言っても大丈夫だという大きな器を作ったから言える。だからこそ、言える。その信頼関係を作ることを、本当に丁寧にやっておられる。これを見習いたいな、と。週の初めには、うちの職員にはそう伝え、指導したいと思っております。ありがとうございました。

司会 嶋野 ありがとうのところに着目された方、他にいますか。どなたか、繋いでいただければと思います。はい。お願いします。

フロアーから 隣の隣からまいりました、本巣市の糸貫中学の和田と申します。ありがとう

という言葉を常に言う、というところで、特別支援学級を担当させていただいているんですが、不登校になって、学力がずいぶん下がってしまって、という子どもたちもいるものですから、勉強させていただこうと思って、この会に参加させていただいたのですが、今まで、いろんな研修をさせていただいた中でも、やっぱりありがたいと言うってことは、常日頃私も学んできているので、私もよく言うようには心がけています。やっぱり同じだな、と聞かせていただきました。それから、信頼関係の方も、実は、聞かせていただきながら、ある生徒を一人思い浮かべておるんですが、足かけ、もう何年になるかなーというくらい、一緒に支援学級で過ごしているんですが、やっと、最近、言いたいことを言っても受け入れられる器ができたな一つと思っています。

司会 嶋野 言いたいことを言っても受け入れられる。

フロアーから はい。例えば、ちょっと失敗しても、絵を描くのになまけいなくても、できない、と言ってびりびりと破り捨てちゃう子だったんですけど、できないって言って、彼の方から、ちょっとここはできないからやってって言えるようになるのに何年もかかったなあという子もいますし、今ではけっこう、えらそうなことは言うんですけど、「それってさーあなたほんとに臆病なんですよ」「ほんとに怖いんじゃないの」っていうと、「そうやねー」というとか、最近言っているのかな。だから、今は、勉強をしないっていうのは、できない自分を認めなくなかったときはしなかったんだと思うんですけど、最近は、勉強できんから、って言えるようになってきて、少しずつ、器を作りかけな感じなんですけど、時間がかかるのかなーと思って、聞かせてもらっていました。

司会 嶋野 ありがとうございます。今のお話に、認める、って、キーワードが出てきましたね。このありがとうございますも、岩佐さん、承認と言っていましたよね。承認には二つあって、「ありがとう」と「すごいね」。しかし、「すごいね」より「ありがとう」の方が効果があるというお話ですよ。確かに、承認、認められる、あるいは認めるということはすごく大事なことなんだろうと思いますけど、そこにもう一つ踏み込みたいのだけど、この「ありがとう」が3パターンあったじゃないですか。その辺りもう一回。僕これ、すごくいいと思うんだけどな。

報告者 岩佐 はい。「ありがとう」3パターン、最初のありがとうは、例えば、日直の当番であって、日直の当番なので黒板を消さなければならない。仕事がありますね。クラスメートで持ちまわっているんですけど。黒板を消すのは、当たり前なんですけれど、でも、黒板を消してくれてありがとう、と言う。「ありがとう」を言って受け取ってもらうという関係を作るレベルです。2つ目は、ここまで消してくれたんだね、ありがとう、という。いつもその子が消してくれている様子も頭に入れておいた上で、今日はここまで、例えば、丁寧にとか、一生懸命にとか、消してくれたな、と伝えるありがとう、ということ。3つ目は、

ありがとう、でも日直だから、実はこれは当たり前のことなんだけどね、という現実も併せて伝えるところ。この3段階でを使って、現実検討を伝えるための器を作ることを意識した「ありがとう」を使っています。

司会 嶋野 三つとも、ただ「ありがとう」を言うことを走らせていないんですね。「ありがとう」って言える事実をちゃんと見つけて、「ありがとう」というパターン。ここまでやってくれて「ありがとう」のパターン。「ありがとう」だけど当たり前だけど「ありがとう」のパターン。ただ「ありがとう」というだけではないということなんですね。そんなところに着目された方も多かったんですけども、木村さん、この「ありがとう」について、どうですか。

コメンテーター 木村（教育事務所） はい。すごく大事な言葉だと思いますし、さっき、「すごいね」よりも「ありがとう」が大事ということは、それすごく大事なことかなと思って。「すごいね」というのは、何かにおいて優れていないといけないよというメッセージが入っちゃうような気がするんですね。前に自分が勤務していた学校でも、「すごいね」よりは「ありがとう」だよ、と似たようなことを話したことはあるんですが、やってくれたことへ感謝、ただただ感謝する言葉を使えることが大事なんじゃないかと話し合ったことがあるので、そのことを思っていました。

司会 嶋野 松木さん、会場からも反応をいただいたんですけど、いかがだったでしょうか。

コメンテーター 松木（文科省） はい。そうですね。要するに、我慢できなくなって思わず言ってしまうとかじゃなくて、ちゃんと関係を構築してからタイミングを見極めて言う、ということは、重要なことだったんですけど、さっき、「ありがとう、でも当然だけどね」と持ち上げて落とすような発言もあって、これ、匙加減、難しいな、と正直思いました。タイミングの見極めとかですね。後、やはり、教員側にも、相当な忍耐も要るでしょうし、生徒の状況について、どれくらい関係性が構築されているかも含めてですね、他の先生とその状況が共有されていることも、重要なことだと思います。ですから、こういったことは学校の先生全体が一丸となって取り組むというような、いろいろなハードルを越えたところで、成立するのかな、というようなことを感じました。

司会 嶋野 私もうすごく着目したんですけど、さっきの、器と、踏み込むという話、他にも、素材はありますか。やっぱり、ただ、いつも、いいね、いいね、いいね、ばかりで、受容していたって、子どもは伸びて行かないんだ、自立にはちょっとというところがある、だから、踏み込むって話をしてくれましたが、かなり勇気の要ることだと思うんですね。だから、踏み込んで現実を突きつける、というところだけを持ち帰ってしまうと、間違っちゃ

いますよね。信頼関係を作って、その子の器づくりをしながら、踏み込むってこのプロセスを見ていただくと、こういう教師のかかわり方の言葉について、岩佐さんはいろいろ経験されて、いろいろ苦労されて、失敗も成功もあって出てきている、ライブな子どもへのかかわり方のノウハウのひとつなんだろうな、とそういうところがすごいなあと思いますね。そんな苦労、ありますか。やっぱり。

コメンテーター 木村（教育事務所） はい。やっぱり、ミスったな、ということもあります。その後、嫌われてしまったり、裏でいろいろで、何だ、あいつ、っていうことでいろいろ言われたり。しまったな、ということで、そこからスタートをしなきゃならなかったこともありますね。全然振り向いてくれないとか、そういう経験はありますね。

司会 嶋野 その他に、この西濃学園が10のスキルを育むために、高めるためにやっていることで、これは効果的だとか、そういうものがございましたでしょうか。

コメンテーター 松木（文科省） 私が今日、感銘を受けたというか、すごいなと思ったのは、寮ですね。まさに、学校に通えなくなったお子さんが、こちらの学校に来て、ここが居場所にちゃんとなって、というのが、非常にいいなあ。不登校児童生徒に対して、例えば家庭学習をITとかを使いながらサポートするとか、いろいろな対策はあるんですけども、実際こういう学校の場に行って、ここが居場所になって、対人コミュニケーションをしながらですね、それで自立を目指していくというのは、なかなか他に例がないといいますが、これがこの学校の特徴だな、と思いました。「寮生活の流れ」にあったと思うんですけど、ちゃんとルールも定められていて、でも、がちがちにしぼっているわけじゃなくて、割と自由な感じもしますし、すごく子どもたちにとっては居心地がよさそうに見える、といいますが、寮生活が今日、素晴らしいなと思った一つであります。

司会 嶋野 はい。ありがとうございました。寮生活も西濃学園ではとても大事なことになっているんですよね。僕は、その他にも、例えば、温泉に行く。それから、地域の祭りで神輿を担がせてもらう。それから、伝統芸能である、太鼓。これを練習して披露する。どなたか言っていましたよね。西濃学園が揖斐川町で存在が認められることが大切なんだ、と。北浦さん、そのところを補足してくれますか。

報告者 北浦（理） はい。私たちは、外から来させていただいた学園ですので、一つは、地域の方に認めてもらえるのか、っていうのは最初から一番心配していたところです。そういった中で、きっかけになったのは、入浴でして、私たちの施設にはお風呂がなかったものですから、地域の温泉に行かせてもらったところから、地域の方々との交流がはじまりました。

司会 嶋野 裸の付き合いですか。

報告者 北浦(理) はい。その通りです。そこから、実際の私たちを見ていただいて、受け入れていただくことができたんじゃないのかな、というふうに振り返っております。

司会 嶋野 松木さん、不登校特例校でこういうような地域と交流しているところがありますか。

コメンテーター 松木(文科省) ここまでのケースは、私自身、聞いていないですけど、やはり、地域のサポートというのは重要だなあと今日のお話を聞いていて、すごく思いました。地域の方が、不登校生徒について、すごく理解をしてくださっているんですね。なかなか人によっては理解しない人もいるんですけど、非常に理解があって、あたたかい目で見ているなあという印象を持ちました。

司会 嶋野 そうですね。不登校、というある意味レッテルが一回貼られてしまうと、どうしても排他的になりがち傾向は一般的にはありがちですね。そういう意味で、揖斐川町は、キャパ、器が大きいですね。木村さん、不登校の子どもたちと地域のかかわりの教育効果、って感じられると思いますか。

コメンテーター 木村(教育事務所) ああ、さっきの風呂の話ですけど、温泉ですね。温泉じゃなくて、西濃学園さんに風呂を作って、そこではいればいい、という発想もあると思うんですね。でも、そうじゃなくて、なんですね。昨日たまたま西濃学園の先生と、夜、話をする機会があったり、他の生徒の姿の映像を見たりしたんですけども、やっぱり、温泉がいい。生徒自身が温泉がいいと言っている、と聞いたんですよ。なんでなの、って聞いたら、地域の人たちと会うことが楽しいと言っていて、そういう、いろんな他者と出会う場がある、そういう機会を作っていることは大事なのではないかと思いました。

司会 嶋野 現実検討スキルの手立てとしても、多様な他者とかかわらせることは大事だと言ってますね。どうですか。

報告者 太田 はい。現実検討を可能にしていくのは、多様な他者とかかわりながら、その多様な他者と共有できる現実を自分の中に形作って、それを受け入れていくことなんだと思っています。

司会 嶋野 それがここにはいっぱいあるんですね。揖斐川マラソンなんかも、あれを見ると、まさに、一つになっていますよね。重要な参加者になっているんですね。そういう地域とのかかわりが、現実検討のスキルを高めていて、この学校の特色ではないかな、と思い

ますね。地域のかかわりでは、北浦学園長さんも、ありがたいなあと思われたこともおありになったんでしょうね。

コメンテーター 北浦（学園長） 今、お風呂のお話が出て、私もお風呂に行かせていただいて、地域の方がうちの生徒に話し掛けてくれてすごくありがたいし、あるとき、私に、先生のところの子は藤橋の子だね、と言ってくれたことがすごくうれしかったときはあるんですが、全部がうまくいくことはありませんでした。うちへ来てもらえる子どもたちは、みんな家にお風呂がありますから銭湯へ行った経験があんまりないんですね。銭湯の入り方というのが分からない。そこから教えていかなければならない。ときどき、お客さんの方から、西濃学園の生徒はちょっとうるさいな、とか、いろいろと言われたりします。すると、生徒を集めてみんなが温泉で楽しくやらなきゃいけないんだからと生徒に考えてもらう、とか、そういう、日常いろんなことが起こってはじめて教育が始まる場所があります。

司会 嶋野 そこまで来るのに、10年以上、かかっているわけですね。

コメンテーター 北浦（学園長） そうですね。

司会 嶋野 この会場の中に西濃学園の生徒と一緒に温泉に入った方、おられますか。ああ、おられますね。どんなものでしたか。

フロアーから 坂内の広瀬と申します。私も、藤橋の温泉を毎日利用させてもらっているんですが、7時半ごろですかね、西濃学園の生徒がやって来られるんですけど、まず、にぎやかですね。そして、サウナに入られる方がいらっしゃいまして、まず、私は、サウナの入り方をレクチャーします。非常にマナーの悪い子もいらっしゃるので、しっかり拭いて入るように教えて、それから話をします。私は、大阪の人間なもんですから、結構思い切ったこと言うんですが、彼らは、もう、なじんで話してくれるようになりました。裸の付き合いができていくということは、非常にいいと思います。今後も続けていただきたいというふうに思います。ありがとうございます。

司会 嶋野 ありがとうございます。もう一方、いらっしゃったようですね。

フロアーから 私は温泉ができてから10年間、ほとんど毎日行っております。年間200回以上入ります。だいたい西濃学園の生徒と同じくらいの時間に入っております。中で入っていると、しゃべっている話題が聞こえてきますが、一般の生徒より立派なことをしゃべるとるんですよ。やかましいことはあんまりないですね。非常に友達と話が合ったり、ほんとに裸の付き合いで、楽しいなという感じがしておりました。地元の行事に参加をしても、神輿を担いでもほんとに最後まで嫌な顔一つもせずに、あの重たい神輿を一生懸命担いで、喜

んで最後までやってくれます。また、清掃やなんかでも、率先して、桶やなんか持ったりして、一般の生徒よりいいという感じを今では持っております。アンケートにも書きましたが、この10年間、なんの悪いことも起きておりません。そういうことで、今後もね、西濃学園なくては藤橋は何の行事もできませんので、よろしく、今まで通りのお付き合いをお願いしたいと思います（拍手が起こる）。

司会 嶋野 北浦学園長、西濃学園の存在感、だいぶ高まってきましたね。

コメンテーター 北浦（学園長） ありがとうございます。私は、この学校を作らせていただくときに、一つの大きな力は、地域の方の力で、その力が不登校の子どもの心を和ませていただけるというのが、僕らの一つの考えだったものですから、地域の方から嫌われるようになったら学校は成り立たないっていう考えで今まで走って来たので、今、会場からお話していただいて、うれしい限りです。ありがとうございます。

司会 嶋野 それは、日本全国、どの子ども共通することなのでしょうね。コミュニティスクールとか、叫ばれてきていますからね。しかも、地域とかかわることによって、子どもの何が育つのか、具体的になりましたよね。ただ、地域がいい、地域がいいというのではなく、かなり明確になりましたよね。昔からよく、子どもは地域で育つんだ、ということは言われるんですけども、じゃあ、子どもの何が育つのか、というのが、かなり整理されてきて、子どもへのかかわり方が分かりやすくなってきたかなと思うんですけど、今、一時間ほど話を進めてきたんですけども、非常に画期的である、今までこういうことがあまりなかったんだということとか、信頼性もあるんだよ、とか、それから、これは他の学校でも大いに活用性が高いんだよ、ということが確認されてきたと思うんですけど、こういうものをさらに、広く活用してもらうことのために、最後に、木村先生から、活用面でお話をいただければありがたいな、と思います。

コメンテーター 木村（教育事務所） 今回、西濃学園さんの実践を聞かせていただいて、ものすごく活かせることがあるな、と思っております。最近読んだ本の中に、こんな本がありまして、『「学校の当たり前」をやめた』って本があります。東京都の公立の中学の校長先生が書いた本なんですけれど、著者の工藤勇一さんという人がですね、学校改革をしてみえるんですね。その中で、彼は、学校教育を根本的に見直さなくてはいけない、と言っているんですが、その中にこんな文章があります。「学校は何のためにあるのか。それは何度も確認してきた通り、社会でよりよく生きるために学ぶ場です。そして、社会には多様な人たちがいるので、感情をコントロールし、対話を重ねながら、納得できる目的を探り当てて手段を生み出す。その体験がとても大切です」という文章です。今回の西濃学園さんの報告と、非常に重なるところがあるなあと思っております。西濃学園さんは不登校特例校としてやってらっしゃって、不登校特例校だからできることもあるんですが、実はそれは一般の学校

であっても、活かしていかなくちやいけないことがあるなあと思ってますので、私もこれを持ち帰って、また広めていけるところがあればいいなと思っています。そして、今日、会場にお越しのみなさまも、何かお感じになったことがきっとあるのではないかなと思いますので、ぜひ、西濃学園さんの方に返していただいて、今後また、こういう報告を多分やっていただくのかな、と思うので継続する中でさらに発展していけるとありがたいなと思っています。ありがとうございました。

司会 嶋野 松木さん、お願いします。

コメンテーター 松木（文科省） 今日は、私自身がいろいろ話を聞き、大変参考になりました。今日の分析、10の要因に分けて、レベル1からレベル5まで整理されたこと自体が大変いいと思っているんですが、今日話を聞いて一番重要だと思ったのが、これを一人の先生が考え出ただけ、というのではなく、みんなで考えて、学校で納得してスタートさせたということだと思います。ですから、今日、自分の学校でもやってみようと思われたときに、形式的に導入するだけじゃなくて、自分たちの学校ではどうしようか、と全員で納得するプロセス、というものが重要だと思いました。その結果、これと違う形で各学校で導入するということがあったらその方がいい、ということがあるかもしれませんけれども、こういう、特定の教科に特有のものじゃないので、学校全体で納得してスタートさせるプロセスが重要だと思っています。そういった部分をぜひ見習うと言いますか、参考にさせていただければと思います。私からは以上でございます。

司会 嶋野 ありがとうございました。私は、不登校の学校とかかわるよりは一般校とかかわることが圧倒的に多いんですけども、今日は、不登校特例校の報告として発表されたんですが、聞いているうちに、いやいやこれはまさに、一般校、全ての学校に非常に重要な報告がされているんじゃないかな、というふうに思いました。そして、学校と地域との関係というのも、すごく印象に残りました。終わりになりますけれども、太田さん、報告をまとめてくれた太田さんから、皆さんのコメントをお聞きになって、どうでしょうか。

報告者 太田 はい。まず、今日は、コメンテーターの方々に参加してもらって、大切なご意見をいただき、ありがとうございました。そして、報告の意義を認めていただけた後、少し心配でした信頼性についても認めていただけたことは、自信につながりました。今後については、2点思ったことがあります。1点は、スケールの評定の客観性を高めることです。生徒を見ていて、こういう行動だったらレベル幾つだね、こういう人とかかわりが見られたらレベル幾つだね、という具体的な行動だったりかわりだったり言動に即した指標、つまりたくさんの方の観察可能な基準を作ること、スケールの客観性をより高めることができるのではないかと思います。それは、同時に、子どもたちとかかわる教員のまなざしも豊かにしてくれたり、あるいは、成長への見通し、道筋をもってその子の行動やかかわりを見

ていけることに繋げられるのかな、という気がしました。もう1点は、レベル2の子をレベル3に押し上げたいな、持っていきたいな、と思ったときには、こういうかわりが意味を持つんだ、ということを細かく、明確にしていくことが必要だと思いました。レベル1の子にはこういう教育環境が効果的なんじゃないか、レベル2の子にはこういう教育環境が、ということを各レベルにおいて見いだせていけて、全体像を描きだすことができれば、西濃学園だけでなく、いろんな子どもの支援に広く役立てることに繋がるのではないかと、そうなるとうれしいな、と今日は感じました。

司会 嶋野 ありがとうございます。今日は、司会の未熟さで、西濃学園がやってきたことのいいところをまだまだ引き出しきれていないんだと思いますけれど、それはまた、活字にしたり、いろいろな形で報告をいただくといいのではと思います。それから、うれしかったのは、会場から、積極的に手を挙げていただいて、お話をいただけたことを感謝申し上げます。ありがとうございます。最後に、北浦学園長から、一言いただいて、時間になりましたので終わりにしたいと思います。

コメンテーター 北浦（学園長） いろいろありがとうございます。今日、いろんなお話をいただいたわけですが、学校を立ち上げてからここまでいろんなことがありまして、先ほどからご評価をいただいている、みんなと話し合う、ということについても、このことはとても重要だと思いますが、私どもの学園にはいろんなタイプの先生がお見えになりまして、私としては非常に複雑な気持ちで接していかなければならない立場でもあります。そうではあるのですが、ただ、私たちが試行錯誤で無我夢中でやっていることが、こういうふう整理されたことが、今後の私たちの励みになると思いますので、今日はどうもありがとうございました（会場、拍手）。

社会参加に影響があると思われる 10 の要因とスケール

① 生活管理スキル…a 健康（投薬や通院を含む）の管理、b 生活リズムの管理、c 金銭や貴重品の管理と衛生など日常生活の管理の 3 領域におけるスキル

- レベル 1 手助けがあっても 3 つの領域で自立できない
- レベル 2 手助けがあっても 2 つの領域で自立できない
- レベル 3 手助けがあっても 1 つの領域で自立できない
- レベル 4 手助けがあれば 3 つの領域で自立できる
- レベル 5 3 つの領域で自立できている

② 基礎学力のスキル…卒業時の五教科の成績の平均値

③ 問題解決のスキル…目標を設定し、計画を立て、それに向かって、注意・集中・欲望をコントロールして計画を実行し達成するスキル。失敗や経験から学び、自分の特性に合っていたり、より効果的な実行を可能とするスキル。

レベル 1 先を見通すことができないので、課題達成において目標の設定ができず、行き当たりばったり。例えば、今日は夜、親がいない、となっても、夕ご飯を何とかしないといけない、思うことができない。例えば進路決定であれば、進路を意識することができず、進路という方向に向かえない。

レベル 2 課題達成に向けて、目標は設定するが、的外れな目標、あるいは適切な計画を立てることができない。夕ご飯を何とかしなければ、と思うが、次に何をしたいかわからない。冷蔵庫を確かめたり、買い物に行ったりしなければ、と筋道を立てることができない。進路決定で言うと、進路を決めなきゃと意識はできるけれど、情報収集できないなど、そこから進めない。

レベル 3 目標・計画を立てることはできるが、うまく実行できない。しなければならないことは分かるのだが、遊んでしまったり優先順位や注意の配分を間違っていてできないなど。進路決定で言うと、進学なのに勉強できない。遊んでしまう。

レベル 4 実行するところまでは達するが、効果的な行動ができず達成に至りにくい。買い物に行くが、家にあるものをきちんと確かめてかないので、買い忘れや多重に買ってしまうことが起こりうる。進路決定で言うと、自分のやり方にこだわるなどして点数に結びつく効果的な勉強ができない。

レベル 5 達成確率が高い、効果的な行動まで可能。過去の学習や自分の失敗のパターンを心得ていて、次に活かすことができる。

④ 協働のスキル…まずは、挨拶や接近など他者と関係を作ることができるスキル。そして、相手の言うことを聞き、相手に合わせたり、思いやりや共感を示したり、適切に自分を伝えるなど、関係を維持することができるスキル。また、好きな人や気が合う人とだけではなく、苦手な人とも協力をして課題に取り組むことができるスキル。そして、リーダーとして集団を作っていくことができるスキル。

レベル 1 他者への関心はあるが、どうとっかかりを作っていいかわからず親しくなることができない。

レベル 2 他者と近づき親しくなることはできるが、一方的なことが多く、トラブルが多くて関係が続かない。

レベル3 他者と親しくなり、関係を維持することはできるが、気の合う人との親しさにとどまる。苦手な人と協力や課題作業ができない。

レベル4 苦手な人とも協力して課題ができるが、リーダー役割までは取れない。

レベル5 レベル4をクリアして、時にはリーダーシップを取り、集団をつくることができる。

⑤ 責任のスキル…他者と信頼関係を築くため、忍耐力や勤勉性や誠実性があり、役割を担うことができ、頼まれたことをやり遂げ遂げるスキル。

レベル1 責任を取らない自分や生き方を望ましいと思っている。

レベル2 なるべく責任を取らないように選択をする。

レベル3 責任を引き受けようとはするが、できなかったとき嘘をついたり、自分以外の責任にしたり（自己を正当化する）、自分が忍耐をしなければならない状況は逃げる。

レベル4 責任を引き受けるが、何かが足りなくて、まっとうすることは十分できないが、それは自分に責任があると認識する。

レベル5 自分が可能な範囲で引き受けることができ、可能な範囲を広げようとすることもでき、他者に助けを求めるなどして、結果として責任を果たすことができる。

⑥ 能動のスキル…意欲や好奇心や向上心を持ち、新しい経験に開かれ、自分から働きかけることや上手な主張ができるなど、自主性や積極性を適切に発揮できるスキル。

レベル1 無気力などの理由から、人から指示されても動くことができない。

レベル2 人から指示されれば、その範囲で動くことはできる。

レベル3 意欲や好奇心はあるが限定されており、その限定された範囲で能動的である。自己主張や自主性はあっても適切に発揮されず、迷惑になることがある。

レベル4 意欲や自主性や向上心はあるが、困難があると挑戦にまでは至らない。自主性が迷惑につながることはない。

レベル5 意欲や自主性や向上心があり困難があっても、挑戦して自分の可能性を切り開いていくことができる。

⑦ 規律のスキル…罪悪感を抱くことができることで道徳性を発揮できるスキル。また、公共という意識があるので状況に応じてルールを守り公正な判断ができるスキル。

レベル1 ルールを破ったり反秩序的な生き方がカッコいいと思っている。

レベル2 ルールは守った方がいいとはわかっているが、自己中心的な見方しかできないのでルールが分からなかったり、欲求に負けてしまう。自分の思い通りになることが正しいという考え方から抜け出すことができない。

レベル3 ルールを守ることはできるが、それは怒られたり誉められたりという他律的な理由によるものである。

レベル4 全体の利益や自らの理想からルールを守ることはでき、罪悪感を道徳性のつなげることもできるが、柔軟でない形式的なルールの運用をしてしまう。

レベル5 公共という意識や、成熟した道徳性があり、守らなかった人の事情を考えたり、許すこともできたりと寛容さがあり、緊急時には例外を認めることもできる。

⑧ 安定のスキル…他者も自分も尊重できるという自尊心があり、ストレスや衝動や感情をコントロールし、情緒の豊かな世界を楽しむスキル。

レベル1 パニックや衝動性をコントロールできなかつたり、不安や攻撃性のコントロールができずに自分や他者に向かってしまい、大きなトラブルや迷惑になる形でしか対処ができない。自殺未遂など。

レベル2 レベル1ほど重大なトラブル・迷惑ではないが、情緒が不安定で、周囲を巻き込んでしまう。自分の気持ちを相手に伝わりやすい受け入れられやすい形で表現することができない。リストカットや過呼吸など。

レベル3 受診を求められるほどの身体症状、精神症状はないが、イライラしていたり、落ち込みやすかったり、穏やかとまではいかない。

レベル4 基本穏やかに安定して過ごせるが、ストレス下では不安定になる。

レベル5 多様なストレスコントロールができ、不安への耐性が高く安定しており、ストレス下でのタフネス、レジリエンスを備えている。また、よりよく生きるために、感情を豊かに使い楽しむことができる。

⑨ 現実検討のスキル…「現実」とは、一般的な他者と共有可能な世界のこと。理想(願望)と現実のバランス、理想(願望)と自分の能力のバランスをとったり、折り合いをつけて現実に向き合えることができるスキル。現実と、心の中の現実を区別するスキル。

レベル1 心の現実が全て。自己愛が傷つくことに耐えることができず、事実や現実を突きつける他者を拒否。心の現実と現実が違うことに気づけない、あるいは、心の現実と現実が違うことには気づこうとすると自分が崩れてしまうので否認してしまう(気づけない、気づかないようにする)。理想にとらわれ、非現実的な目標を立てたり、理想がかなわないならば全てに意味はない、などゼロか百かの思考になってしまう。了解できない思考。また、自己愛的世界にいるので、全ては社会や他者が悪く、苦しめない。悩めない。

レベル2 心の現実と現実が違うことはわかり、現実と理想のずれに非常に苦しみ、悩むが、やはり現実を受け入れられない。妥協して現実に合わせてことは拒否。

レベル3 心の現実と現実が違うことはわかり、現実と理想のずれに非常に苦しんでいるが、現実を受け入れたり拒否したりしつつ、現実と向き合って折り合える過程を模索中。

レベル4 現実を引き受けることができ、苦しみは軽減する。しかし、理想や空想を楽しむとつらくなってしまうので、過度にネガティブに世界を見ることで安定している。ネガティブな思考。

レベル5 現実を引き受け、受け入れることができる。ポジティブに世界を受け止めている。ポジティブでバランスの取れた思考が可能となる。また、心の世界で楽しむこともでき、空想世界として認識しており、行ったり来たりすることを楽しむことができるなど、上手な退行ができる。

⑩ 環境調整…親の希望や社会的な望ましさより、本人の能力や特性を適切に判断した結果の進路決定ができたかどうかの程度。

レベル1 進路を見つけてあげることができなかった。

レベル2 進路先に送り出したはいいが、本人の適性よりも期待や理想が大きいなどで、無理なのではないか、と不安の方が大きい環境。

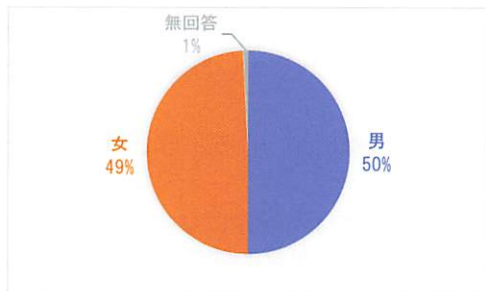
レベル3 不安と安心が五分五分で、手厚いフォローが求められる進路先。

レベル4 安心の方が大きい、フォローがあった方がいい進路先。

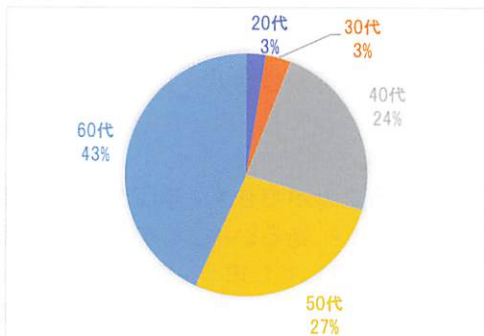
レベル5 フォローも必要ないほどに安心して送り出せる、適切な環境。

平成 30 年度教育実践報告会アンケート集計結果（有効回答者数 118 名）

1. 性別

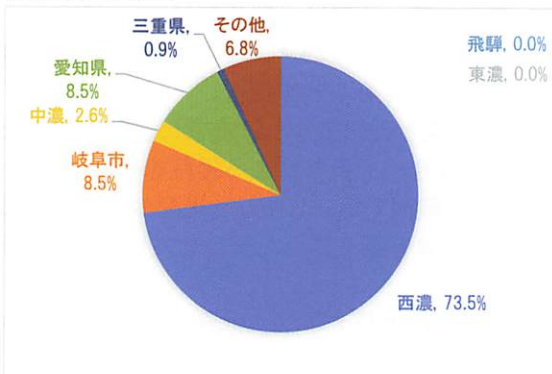


2. 年齢



昨年度は 20 代 0 人だったが、今年は 3 人。30 代も 4 人と若い世代が少し増えた。

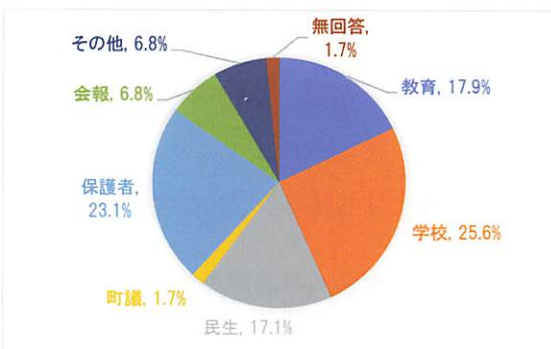
3. お住まいの地域



（その他）

岐阜地区、羽島郡、山口市、瑞穂市、福岡県、福井県

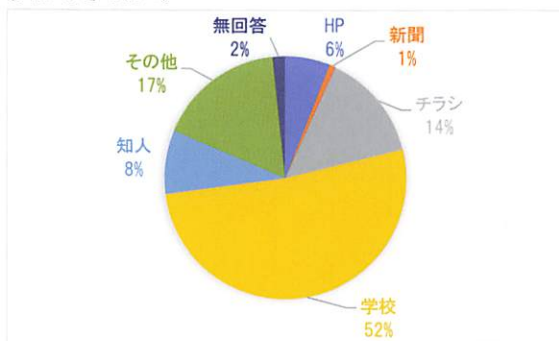
4. 関わり



（その他）

評議員、卒業生の親、地域、無回答5件

5. 参加のきっかけ

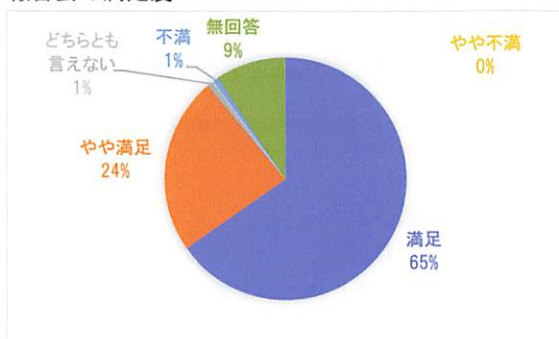


(その他)

案内、招待、教育委員、無回答 9 件

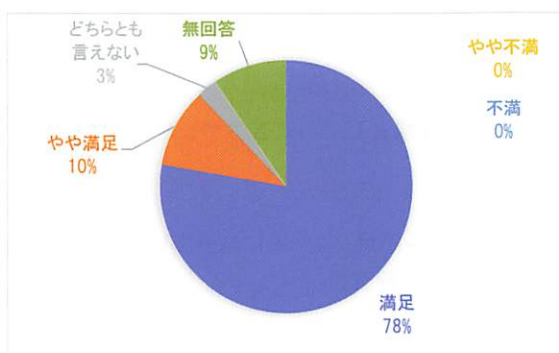
昨年に比べ、新聞記事による参加は大幅に減った。しかし0ではないため、今後も新聞掲載は続けるべき。

6. 報告会の満足度

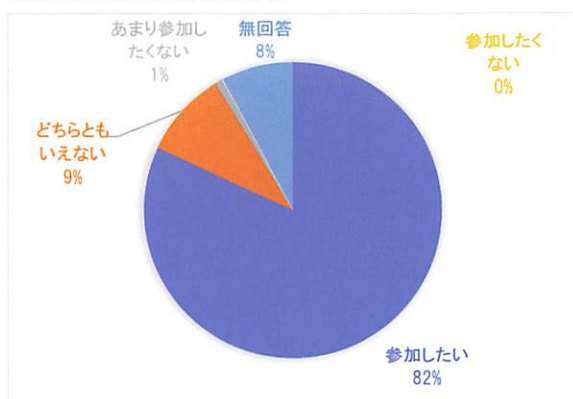


約 90%が満足していただけた。昨年より10%UP。

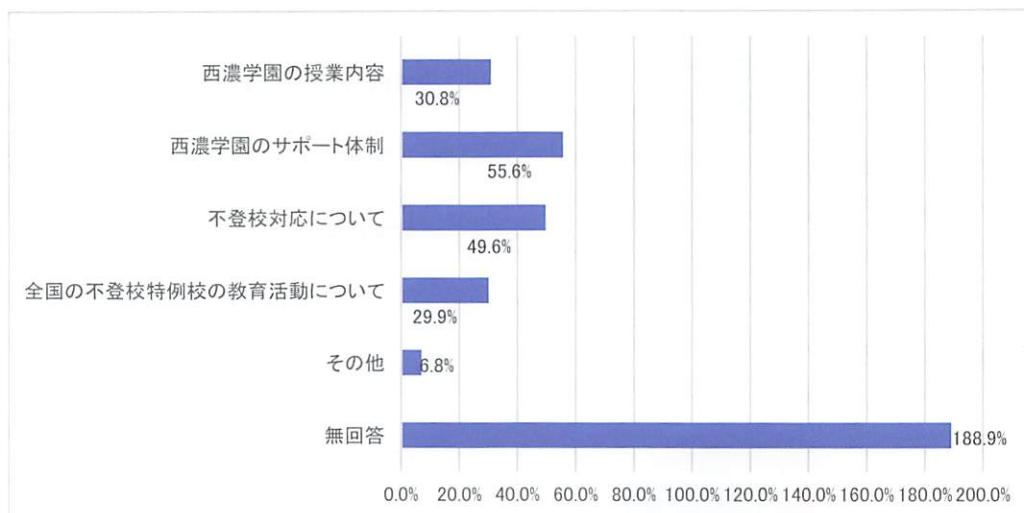
7. 職員の対応



8. また報告会に参加したいか



9. 今後の報告会で聞いてみたいこと



<その他>

- 学園で報告したいことを好きにやって貰えばいいと思います。
- 家族との関係。家を離れて暮らすことでの親子関係の変化等
- 社会情動スキルを伸ばすことのできた事例研究（関わり方）についての報告
- 学園内での生徒同士のコミュニケーションについて
- 親子との関わり、コミュニケーションの取り方など
- 西濃学園のイベントなど
- 学園の財務状況、行政その他からの助成・補助状況
- 卒業生（3年生）からの実践発表（昨年のように生の声が聞きたかった）。
- 学校法人となられるまでの取り組み、運営をする立場としてのご苦労や、現在につながったこと。
- 地域との関わりの詳細
- 不登校の原因がさまざまあるが、コミュニケーション不足、ニートにならないように、関わり方の実践、観察可能なスキル、個人集団の中で、さらに研究を

10. ご自由にお書きください。(青字：要望・聞きたいこと 赤字：指摘)

I. 教育関係

• 20代男性

自信を持ってない生徒への関わり方について、参考となる知識や事例を学ぶことができました。

• 20代女性

要因を10個に分けて分析、考察、非常に参考になりました。不登校生徒と関わる1人として、なんの要因が不足しているのか考え、対応に活かせたらと思います。ありがとうございました。

• 40代男性

非常に熱心な取り組みに感銘しました。あとは自分たちの取り組みに自信を持ちすぎず、謙虚に常に振り返りながら取り組んでいただきたいと思います。不登校児童生徒という特殊な配慮が必要な子供と向き合っているからこそ。

• 40代男性

社会参加の要因分析、大変興味深く聞かせていただきました。地域と一体で生活スキルを高めていける西濃学園ならではの取り組みもあるかと思いますが、一般の学校、家庭でも十分参考になる報告だったと思います。さらなる実践・報告を期待しております。

• 50代女性

社会情動スキルについて勉強させていただきました。これから自分がどのように関わっていくと良いのかを考えることができました。ありがとうございました。

• 40代女性

西濃学園にくるまでのサポート体制(学校との連携)も大切であるように思った。少しでも前向きな気持ちで入学を決めてこられると、より適応が良いのではないかと。

事例を失敗と成功に分けて紹介されていたが、「失敗」ではなく、あくまで「どのように失敗体験を積ませるのか、課題が残ったケース」なのではないか。失敗といううち、無理であっても挑戦した、という点で、子供にとっては意味のある体験であったように思う(個人的には、子育てに手遅れはないと信じている)。

• 50代男性

社会的情動スキル→非認知スキル 幼児教育でも大切にされています。

10のスキル→幼児教育「10の姿」という定義があり、共通する考え方があると感じました。

子どもの器を変えていく、大きくしていくことも大切。

→普通の公立学校のあり方、器も、子どもの実態に則り変えていく必要があると思います。

- 50 代男性

「学校に行けなくなった子が、学校（西濃学園）で育つ」これが西濃学園の成長であり、岐阜県（日本）の教育界に一石を投じていると考えます。北浦学園長の教育観やたましいを尊敬し、今後も学びたいと思います。

研究報告は職場で共有し、施策に生かしたいと思いました。職員の皆様全員に敬意を評します。ありがとうございます。

町立西濃学園という町長・町民がとてもかっこ良いです。

- 50 代男性

学園の姿勢のすばらしさが成果の土台となっていると思いました。**学力と不登校については、やや学園の特異性があると思います。**経済的な支援があること、他の学校の多くの不登校は対人関係が苦手な子と低学力が重なると不登校になる子が多いです。

6.3%の発達障害については、学園でも例外が多いはず。そのあたりのケアが必要と思いました。

- 50 代男性

科学的な分析を根拠として説明され、わかりやすかった。「すごいね」より「ありがとう」に共感しました。

- 50 代女性

社会情動的スキルの細分化、素晴らしいと感じました。学校に適応しづらい生徒に接する時の指標を得たように思います。これまでなんとなく感じていたことをこのように示していただけて、今後の指導の参考になります。

学校の報告会にこれだけ多くの地域の方々が参加されていることにも感激しました。お風呂の件で、保護者の方が発言された時に、自然に拍手が広がったことも、学園が愛されている証しなのだと感じました。ありがとうございました。

- 60 代以上女性

立派な講師の方々、中央の情報、西濃学園の丁寧な分析をありがとうございました。

- 60 代以上女性

実践報告の内容、話の進め方、資料等、よく理解でき、本当に頭が下がります。ありがとうございました。

シンポジウム、司会、文科省、事務所の先生たち、熱心でよく伝わってきました。

- 60 代以上女性、会報を読まれている方

本研究報告を関係学会でなさいましたか？（まだなら是非なさってください。）

II. 学校関係

- 20代女性
10年間の蓄積、大変有意義なものであったと思います。10項目も通常級でもバロメーターとして活用させていただきたいと思いました。準備等お疲れ様でした。本日はありがとうございました。
- 30代女性
本日はありがとうございました。自校の不登校児童を思い浮かべながら聞かせていただきました。10個の視点はそういった子どもたちに対して、必要な支援をする上で役立てていきたいと思います。貴重な実践ありがとうございました。
- 40代男性
不登校生徒は年々増加している。今では1クラスに1人不登校があるということである。不登校になる原因はいろいろなケースがあると思うが、やはり大切なことは信頼関係を築くことだと思う。今日はたくさんのことを学ばせていただきました。ありがとうございました。
- 40代男性
信頼あつての教育であると強く感じました。
また、生徒さんの情報を学校全体で共有することの重要性を認識するとともに、自分の学校での実践の難しさも同時に感じたところです。
- 40代女性
職場に戻って他の職員へも報告させていただきます。4月からのスタート、全職員が“ありがとうキャンペーン”をやりたいと思います。
- 40代女性
本校の不登校となっている生徒の要因は、家庭環境の困難さ、母子分離不安、兄弟姉妹で不登校、特別支援が必要な子、と多岐に渡ります。今年度の中3の進路は昨年と比べて、難しさを感じました。また、義務教育9カ年、ほとんどが不登校となっている子も増えてきました。この西濃学園の門をくぐった時には、解決の可能性があると思いますが、ここにつなげることの難しさを感じています。
スキルについて参考になりました。本校に持ち帰り、報告させていただきます。
- 50代男性
学ぶことが多くありました。ありがとうございました。
- 50代男性
西濃学園で学んでもその支援を外されると、就学・就労とまではいかない子達がまだいる現実をさらに減らしていきたいという取り組みに、頭が下がります。10のスキルで子供達を分析し、力をつけさせたいという先生方の情熱を自分の学校にも取り入れたいと思う。

- 50 代男性

先生方が分析のための視点をしっかりと共有した上で、全職員で自信を持って日々の実践に臨んで見えることが伝わってきました。私どもの学校現場でも、同じような見通しと、共働のスタイルが確立されればと思うのですが……。大変勉強になる報告会をしてくださり、ありがとうございました。
- 50 代男性

学園を卒業した生徒の社会的自立について調査、分析されたことを大変興味深く拝聴いたしました。子供達が学校で学ぶこと、体験することが、その後の社会に出た時に役立つものでなければならないということを肝に命じ、私も日々の教育に尽力していきたいという思いを強くしました。西濃学園の皆さんが真摯に教育に立ち向かわれている姿を伺い知ることができ、素晴らしい報告会でした。ありがとうございました。
- 50 代男性

不登校の要因として、学力よりも「社会情動スキル」が重要であるという要因分析の結果がとても参考になりました。「社会情動スキル」について、もっと学びたいと思いました。
- 50 代男性

60 分のシンポジウム、この報告を前もってシンポジストに示し、司会を職員に任せ、嶋野氏を含め松木氏、木村氏の 3 人にそれぞれの視点から発表をしてもらい、30 分の討議とした方が良かったのでは？
- 50 代女性

貴重な報告会、シンポジウムに参加させていただき、ありがとうございました。現実に基づいた細かな分析、プロセスは、大変勉強になりました。職員の認識の共有化、チーム力の素晴らしさに感銘しました。今後の参考にさせていただきたいと思います。

生徒の支援、社会へ出すこと、我々も頑張っていきたいと改めて元気をいただきました。どうもありがとうございました。
- 50 代女性

学校において不登校、不適應支援に携わっている者です。大変役に立つ報告でした。関わっている生徒を思い浮かべながら聞いておりました。

勤務している中学校では、勉強がわからない→授業が不安→発表が怖い→提出物が出せない、宿題ができない・・・というきっかけで休み始める生徒も多く、だんだん怠学傾向に陥ってしまっています。学習面におけるサポート体制が現状では難しく、「わからない、できない」がそのまま放置されていることが学校現場の課題ではないか、と感じています。

学習サポート、通常の学校ではどのようにしていくと良いかと考えます。
- 50 代女性

不登校の原因、、、不登校生徒と関わる中で、わかったことがあると思うので、実際に生徒を追った実態とその指導

- 60 代以上男性
 西濃学園の先生、職員の皆さんのご健康に注意して、頑張っていたきたいと思います。
 いろんな生徒のためにも。
- 60 代以上女性
 今日の話し合い、説得性・方向性があり、よかったですと思います。
 学力とは何か。社会性のスキルを大切にすることの関係―段階的に並列に
 社会的自立への取り組み―卒業後も見ていく―大切にしてほしい
 コミュニケーションの取り方―力を入れる―ニートにならないために
 学力の評価方法（基準を学校全体で考える）
 信頼関係、器を作る、ありがとうを大切に
 寮生活―自分の居場所、承認
 地域の人に認められる、理解される―入浴、マラソン、祭り―他者との共有、社会参加
 スキルの活用―全員が納得 いろいろ勉強になりました。ありがとうございました。
- 池田小学校 小倉千佳代
 小学校の校長です。公立私立の小中学校では基礎学力をつけることが第一だと思う教職員、保護者がまだまだ多いのが現実です。良い高校へ良い大学へ行くことがゴールだという風潮がまだまだ根強く感じます。その子の一生涯において、小学校は中学校はどんな力をつけるのか、社会的に「自立」する人間にしていけること、幸せに暮らしていける人間をつくるのがゴールでありたいと再認識し、その上で今、小学生に何をすべきか、もう一度教職員と考えたいと思います。
 不登校、不登校傾向だけでなく、数として上がっていない予備軍（保健室へ行きたがる、嫌だけど、無理やり来させられている等）に目をつけていかねばならないことを強く感じました。ありがとうございました。
- 大垣商業高校 土本繁
 今回の報告会を通して、地域に必要とされる学校として今後も見守っていきたいと思います。不登校特例校としてのモデル校ではあるが、どの学校にも共通した教育のあり方を考えさせられる報告会であったと思います。西濃学園の先生方の熱心な指導に感謝します。「ありがとう」を伝えたいと思います。
- 大野 宏
 昨年に続き、今年も楽しみにして、この日（実践発表日）を待っていました。できれば本来の様子も学園に足を運び、生徒や先生方の姿を自分の目で見たいです。ありがとうございました。

III. 民生委員

- 60代以上男性
陸上、駅伝等、スポーツに対する取り組み以外に、クラブ活動や音楽、美術への取り組みはあるのですか？
- 60代以上男性
不登校生徒の就労、就学は大変高く、これだけでも素晴らしいことだと思うが、その上で10のスキルに検討を加え、より以上に社会参加できるよう活躍を願う。
- 60代以上男性
民生委員の地域づくり特に温泉（地元）と学校のカリキュラムと（・・・解説できませんでした・・・）町として生かす形で活力として（・・・）
- 60代以上女性
先生方の御努力はよくわかりました。今後どのように進めていかれるのか、このままの状態に進められるのか、先生方の自己満足でならないように、よろしくお願いします。
- 60代以上女性
人を育てるということについて考えさせていただきました。
- 60代以上女性
素晴らしい報告をありがとうございました。
- 60代以上女性
生徒と先生の信頼関係が良くできている様子。
野外への研修を増やし、先生生徒の信頼関係を強く持っていただきたい。
実際に西濃学園を卒業された方の話を聞きたい。
- 60代以上女性
初めて学園のことを知りました。とても重要な学校だと認識しました。
- 60代以上女性
藤橋だけでなく、揖斐川町全体と関わっていただけたらと思います。
頑張らない、一つの方法として、緩めて、「ゆる体操」で全てのスキルがアップするのでは？私自身10年以上続けて実感しています。
- 60代以上
地域の関わり、とても勉強になりました。引きこもり、ニートの人も多い現在、30才すぎの人も心配

IV. 揖斐川町議会議員

- 60 代以上男性

10 年に及ぶ実績をもとに、スキルのレベルを充分に分析をされ、的確な指標が出来上がってきていることに感心しました。今後とも、生徒たちの自立の助けとなっていくよう、お願い申し上げます。

V. 保護者

- 30 代男性

いつも西濃学園様には本当に感謝しております。今回の報告会にありました、様々なスキルは詳細に調査されており、大変勉強になりました。今後ともよろしくお願い申し上げます。

- 40 代女性

息子が学園にお世話になっています。普段から先生方を信頼していますが、今日この報告会に参加して、その思いが強まりました。ありがとうございます。

- 40 代女性

10 のスキルの中で精神安定が中学で 8 位なのが高校で 2 位になっていますが、西濃学園でうまく子供達が成長できている要因が、SC が教員と生徒一人一人について共有（ケースカンファレンス等で）していることが大きいのだろーうと思いました。今後ともよろしくお願いします。

- 40 代女性

先生が子供達のことをよく見てくださっていると感じました。いつもありがとうございます。

- 40 代女性

今後の課題が多くて、よくわからなくなった。スキルを育てるため、親として何ができるのか。

- 40 代女性

今回参加して、西濃学園の良さが改めて感じました。今子どもが通っていて、行ってよかったと思いました。これからもよろしくお願いします。

- 40 代女性

子供達の中学校、高校の 3 年、6 年間のために、いろいろな角度から時間をかけて対応していただいているのが感じられて、とても感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

- 40 代女性

本校の具体的な成功例、失敗例や 10 項目におけるスキルの分析が大変わかりやすく、息子の今後の成長が不安と期待で複雑な気持ちではありますが、先生方や地域の方々のお力をお借りして、高校 3 年間で自立を身につけて、器の大きい大人になっていることを願ってなりません。本日の報告会に出席して、他校の中学校の先生方のお話、地域の方々のお話を聞かせていただき、息子を本校に安心して任せる学校だと確信できました。

息子との親子関係、アドバイスをたくさんいただき、大変感謝しております。今後ともお世話になりますが、よろしくご指導、ご支援をお願いいたします。ありがとうございました。
- 40 代女性

家庭での子供との関わり方にも大変参考になる内容でした。ありがとうございました。
- 40 代女性

今回も良い話が聞けました。一緒にお風呂に入られている方の声も聞けてよかったです。いろんな学校の先生方も来ていただき、参考にしてもらい、不登校の子が減ると良いと思いました。

ありがたいの 3 段階、大いに使っていきたいです。
- 40 代女性

松木さんが質問された“にぶい”という言葉で、器ができていればと言われていましたが、私はあまり好きな言葉ではありません。大人は心で受け止めるかもしれませんが、子供はどうだろうと思いました。自分の子供にはあまり使わないので気になりました。自分のお子さんに言われるのでしょうか？

ありがたいをたくさんいうことは大切と聞きますので続けていこうと思いました。
- 40 代女性

生活管理のスキル、規律のスキルは家庭でつけておくべきなのに、できておらず、学校で考えていただけていることに感謝しております。また、振り返り、自分自身反省し、考えるきっかけになりました。
- 40 代女性

本人が卒業後、最終的に就職して自立していきっていくことができるのか、考えるととても不安です。親としてどうしたらいいか教えていただきたいです。

子供も反抗期なので、接するのが難しく、何を考えているのかわからないです。本人が卒業後、就職希望なのか進学希望なのかも知らない状態でしたので、この先はもっと、先生と親が連絡を取っていく必要があるんじゃないかと思いました。

本人の現状について、もっと知りたいです。先生方が熱心に指導してくださっているのは、よく伝わってきますので、ありがたく思っています。
- 50 代男性

保護者である親の対応について教えていただきたい。

- 50 代男性

色々、様々な生徒が居ることが理解できた（報告事例から）。

だが、まだまだ実際の暮らしぶりについて、どんな風に暮らしているのか？と思うところがあるため、さらに映像にて生徒の様子を見たいと思いました（こと細かい部分まで）。保護者としてより理解できるので。

多様な個性が集まる西濃学園の本報告（分析）とても参考になりました。これからもよろしく願いいたします。
- 50 代男性

「すごいね」「ありがとう」言葉の意味、使い方に新たな発見をしました。
- 50 代女性

具体的な事例を挙げて説明していただき、とてもわかりやすかったです。学園では、中学3年間お世話になり、引き続き高校でもお世話になることになりました。正直なところ、中学3年間で①生活管理スキルが身についたとは言えず、この先、高校生になってどうなるかととても不安ではありますが、職員の方々がとても信頼できるので、子供を信じてこれからもお世話になります。どうぞよろしくお願いします。

岩佐先生のありがとうのお話はすごくいいお話でした。うちの子もありがとうという言葉が家で言うようになった時、嬉しかったです。これは先生のご指導のおかげだと思います。

学園は地域の方々に支えられていることがよくわかりました。保護者代わりになってくださっていてありがたいです。
- 60 代以上女性

子供がお世話になっています。中学1年の時から関わってもらい、ずいぶん時間がかかったけれど、当たり前前の学校生活を送れるようになりました。不安ではなかった世界が、安心して足を一步踏み出せる世界へと変わっていったのだろうと思います。そのためのさなぎの状態のような2年を費やしたのかと思います。（その期間の変化の乏しさを）親として待ち続けてよかったと思いました。
- 60 代以上男性

ニート群にスポットを当てた発表は「目からウロコ」だった。先生の生徒に対する関わり方が素晴らしいと感じました。
- 60 代以上女性

社会参加に影響があると思われる要因（10 項目のスキル）については、他の公立の学校等にも生かせると良いと思いました。
- 40 代女性、卒業生の親

良き先生、学校にお世話になってきたんだと改めて思いました。今は親の欲も出てきてしまいました。“よくここまで成長してくれて”と振り返る良い機会となりました。ありがとうございました。

VI. 会報を読まれている方

- 40代女性、会報を読まれている方
仕事上、引きこもりの方の相談支援に携わることが多い中で、社会参加に必要なスキルについて、多くのヒントを教えていただきました。それらを身につけていくための具体的な手立てをまた、今後を報告会で教えていただければありがたいです。本日はありがとうございました。
- 60代以上男性、会報を読まれている方
大成功だと思います。これからも研鑽よろしくお願いします。お疲れ様でした。
- 60代以上男性、会報を読まれている方
貴校の教育実践報告会に参加させていただき、不登校生徒の自立支援の取り組む情熱と日頃の研鑽に感服いたしました。学園の願うスキル形成に役立つ教育環境に我々地域住民がどのように協力したら良いか、考察したいと思いました。
- 60代以上男性、会報を読まれている方
卒業生の現状、本人の社会での体験談。
- 60代以上男性、会報を読まれている方
社会に協力ができる子どもにするために頑張る学校に大きく期待しております。特に農山村に対する考えも入れて欲しい。

VII. その他

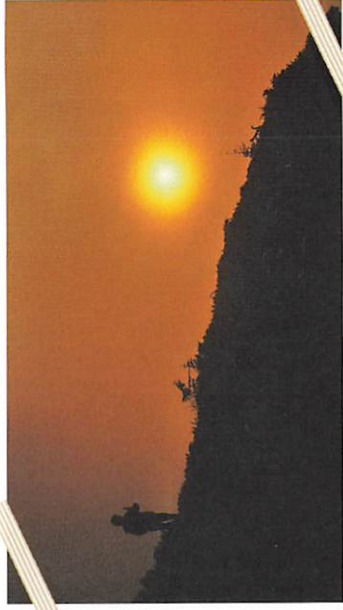
- 30代女性
本校の児童に自己見つけをさせることをしてみようと思います。自分と向き合うことで、現実検討のスキルをどの子にも行う機会を作っていきたいです。ありがとうございました。
- 40代女性
今回、知人の紹介により、報告会に参加させていただきました。息子が不登校になりかけた時のことを思い出しました。このような報告会に参加していたら、もっと違う対応ができていたかもしれません。本当に参加できて良かったです。ありがとうございました。
- 40代女性、地域
実践報告会、大変わかりやすく内容が充実していた。事例がとてもわかりやすい。
- 50代女性
人を育てる心を育てる教育は素晴らしいです。表には出ていない、ご苦労が本当に多いと思いますが、子どもと保護者を今後も支援していただけることを期待しております。

- 60 代以上男性、評議員
西濃学園すごい発表だった。地域ではなくてはならない西濃学園になっている。この 10 年悪いことは何も起きていない。
- 60 代以上男性
大変有意義な報告会でした。今後もぜひ再度開催をしていただきたい。
- 60 代以上女性
ある時、西横山のお寺（善竜寺）で、西濃学園の生徒さんと会う機会がありました。その時、中学 3 年生等男子生徒さんが、お寺の屋根を見上げて「立派なお寺ですねー」と言ったのです。その一言に感動しました。



学校法人西濃学園10年のあゆみ













平成30年度
西濃学園教育報告書
生徒に育てたいスキルとは
～社会参加を助けるために～

平成31年 3 月発行

発 行 学校法人西濃学園
印 刷 (株)旭クリエイト
〒503-2124 岐阜県不破郡垂井町宮代1478
TEL 0584-23-3211